

# いわゆるパリ・ノートと『経済学・ 哲学草稿』について

——「ラーピン論文」公表以前を中心として——

岡 崎 栄 松

## 目 次

- [1] はじめに——本稿の課題
- [2] 「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の公刊
- [3] ローゼンベルクの先駆的研究
- [4] 「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の邦訳
- [5] 「ミル評注」先行論者たちの見解
- [6] 『経哲草稿』先行論者たちの見解
- [7] む す び

## [1] はじめに——本稿の課題

ここで、いわゆるパリ・ノートとは、いうまでもなく、マルクスのパリ時代（1843年10月から1845年2月初旬）に彼が作成した、経済学にかんする抜粋ノートのことである。マルクスの経済学研究が開始された時期については、いろいろの説があるが、いま故細見英氏の見解をとりあげれば、氏は、その論稿「ヘーゲル市民社会論とマルクス」（本誌『立命館経済学』第11巻第1・2合併号、1962年6月所載。のち、この論稿は同氏の急逝後、1979年、稲村勲氏の手で慎重かつ適切に編集・出版された細見英著『経済学批判と弁証法』（遺著）未来社に収録された）において次のように述べておられる。

「マルクスの経済学研究着手の時期については、従来二つの説がある。一つは、『44年初め（3月頃）』説（岡崎・渡辺訳『マルクス年譜』29ページ参照）、他は

『43年末』説（Marx/Engels, Werke, Bd. 1, S. 629 参照）である。おもうに前者は、44年2月末『独仏年誌』にのせられたエンゲルスの『国民経済学批判大綱』が、マルクスが経済学研究に着手する決定的な動機を与えたとみる通説に沿って唱えられているのではなかろうか。しかしわたしは、マルクスの経済学研究は、ヘーゲル法哲学批判の展開深化として、かれ自身の思索過程において内的必然性をもって始められたものとする。とすればマルクスが、エンゲルスの『大綱』発表以前の43年末頃に、すでに経済学研究に着手していたとしてもけっして不思議ではない。ちなみにエンゲルスは『資本論』第2巻への序文で、『マルクスは経済学研究を、1843年にパリで始めた』と言っている」（前掲書、154ページ）。

ここで細見氏が『独仏年誌』といているのは、もとより、マルクスとA. ルーゲが共同編集して1844年2月にパリで発行した急進的雑誌の第1・2合併号のことであり、その雑誌にはエンゲルスの「大綱」とともにマルクス執筆の二論文——すなわち「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル法哲学批判・序説」——も同時に公表されたのであった。それはともかく、マルクスが経済学研究の必要性を痛感するにいたったのは、彼の『ライン新聞』時代（1842年4月～1843年3月）の活動を通じてのことであったから、ここで細見氏が、マルクスの経済学研究は同誌掲載の上記二論文の仕上げ過程で43年末頃から、「ヘーゲル法哲学批判の展開深化として、かれ自身の思索過程において内的必然性をもって始められた」とするのは、ごく自然のことと思われる。ただし、上の一文で細見氏が、あたかもマルクスは『独仏年誌』発行後に初めてエンゲルスの「大綱」と遭遇したかのように考えておられるのは、私には納得がいかない。というのは、マルクスは『独仏年誌』編集者の一人だったのだから、当時マンチェスター在住のエンゲルスから1843年の暮、または遅くとも翌44年の1月には「大綱」の原稿を送付されていたことであろうし、その原稿をマルクスは印刷にまわすまえに、さっそく念入りに読んでいたであろうことは疑う余地がないからである。

もっとも、その後のマルクスは、ただひたすらに経済学研究だけに従事した

というわけではない。44年の1月～3月には、彼はフランス革命史の研究を熱心におこなっている（もっとも、この間も彼が経済学研究を放棄していたとは考えられないが）。ともあれ、同年4月頃からマルクスの経済学研究は本格化するのだが、8月の終りにはエンゲルスがマンチェスターから故郷バルメンへの帰途、パリに立ち寄り、マルクスの家ではほぼ10日間を過すことになる。このとき彼らは、かつての盟友B. バウアーとその仲間を批判すべく、『聖家族』を共同で書くことについて意見が一致する。そしてマルクス自身は、同年の9月上旬から11月にかけてこの『聖家族』の執筆をつづけ、その後、ときのフランス政府の国外追放令によって翌45年2月初旬、ベルギーのブリュッセルへ移ることになるまで、経済学研究（抜粋ノートの作成）を継続したのであった。

こうしてマルクスの「パリ・ノート」は、1844年のはじめから翌45年のはじめまでの約1年間に、若干の中断期間を伴いながら、作成されたのであるが、この間に彼は『経済学・哲学草稿』（1844年4月から8月まで）を執筆したのであって、その精力的な研究ぶりには、ただ文字どおり目を見張るばかりである。

さて、つぎに本稿のサブ・タイトルにある「ラーピン論文」についてであるが、これは、ソ連の経済学者エヌ・イ・ラーピンの、『ドイツ哲学雑誌』1969年第2号に公表された論文「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」N. I. Lapin, Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 1969, Heft 2. 細見英訳、雑誌『思想』岩波書店、1971年3月号所収を指している。

この「ラーピン論文」は、わが国における初期マルクスの研究、とくに「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の研究にたいして大きな、画期的ともいふべき影響をあたえたものであった。いまではすでに20年も前のものではあるが、私は、いったい「ラーピン論文」とは、どのような内容のものであったか、そしてそれは、わが国における「パリ・ノート」および『経哲草稿』の研究にどんな影響を及ぼしたのか、といった諸点を、いま改めて問題にしておきたいと思う。だが、そのためには「ラーピン論文」公表以前の研究状況をあらかじめ

め知っておくことが必要であろう。

ところで服部文男氏は、その論文「新『マルクス＝エンゲルス全集』とマルクス＝エンゲルス研究の新段階」（雑誌『経済』第227号、新日本出版社、1983年3月所載。のち服部文男著『マルクス主義の形成』青木書店、1984年所収）において次のように説いておられる。——「執筆時期の推定や先後関係の確定というような作業は、それぞれの著作や論文そのものの内容、とりわけ用語や表現などの特徴や変化を手がかりとしてすすめられることも多いが、引用されている著書や新聞論説に着目して、その発行時期から間接的に推定するとか、ある事件などに関説しているさいには、その日時をもとに割り出すという方法も多くもちいられる。さらに、マルクスやエンゲルスの場合、数多くのこざれている手紙が、執筆や発表の時期の推定にさいして、きわめて重要な役割をはたすことはいうまでもないであろう。／いずれにせよ、これらの作業は、一見すると重箱の隅をつつくようなものなので、その重要性が一般に認められているとはいいたいが、じつは、内容そのものを論ずる以前に、まずなされていなければならない基本的な作業なのである」（前掲書、117ページ）。

このように服部氏は「書誌学的考察」あるいは文献考証的研究の重要性を指摘されて、「一見すると重箱の隅をつつくようなもの」であっても、こうした「書誌学的考察」は「内容そのものを論ずる以前に、まずなされていなければならない基本的な作業」なのだとして力説される。そして氏自身、このような「書誌学的考察」によって「パリ・ノート」や『経哲草稿』の研究分野でも数々の貴重な成果を挙げてこられて、そうした成果は氏の前掲書に集約的に収められているといっておかれる。

（注） なお服部氏は、このような「書誌学的考察」は「マルクスやエンゲルスの思想や理論の発展を正確にあとづけるためにも、必要不可欠な作業である」（前掲書、117ページ）とされ、また、それは「思想の発展が飛躍的におこなわれる彼らの青年期について、とくに重要な意味をもつ」（同上）とも強調されているが、前掲書208ページにもこの点の適切な指摘がある。なおまた、こうした点にかんしては拙稿「服部文男著『マルクス主義の形成』について」（本誌『立命館経済学』第34巻第1号、1985年4月所収、99—100ページ）をも参照されたい。

さて本稿は、前述したように、「ラービン論文」の公表がわが国における「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の研究分野に惹起した大きな波紋を跡づけるための、いわば予備的考察として、同論文公表以前のこの分野での研究状況を——とくに執筆順序の問題に重点を置きながら——やや立ち入って見ておくことを課題とするものである。だが、事の順序としてわれわれはまず、「パリ・ノート」と『経哲草稿』が公刊された経緯ないし事情そのものを取りあげることから始めよう。

## 〔2〕 「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の公刊

すでに述べたように、「パリ・ノート」は、マルクスが1844年はじめから翌45年はじめにかけて執筆・作成した、経済学の抜粋ノートのことであるが、このうち現存ノートの重要な部分が公刊されたのは、彼の死後ほぼ半世紀を経た1932年、モスクワのマルクス＝エンゲルス研究所からヴェ・アドラツキー編集のもとにベルリンで刊行された『マルクス＝エンゲルス全集』第Ⅰ部第3巻（Karl Marx/Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 3 (≡MEGA<sup>Ⓐ</sup>, I/3), Berlin, 1932.)においてであった。この、いわゆる旧メガI/3の編集部「はしがき」が、「〔ノートの〕外見上および内容上の証拠をすべて考慮したうえで、可能なかぎり執筆順に」配列したという内容目録は、ほぼ次のようなものであった（Vgl. MEGA<sup>Ⓐ</sup>, I/3, SS. 410—416）。やや長い目録一覧ではあるが、行論の必要上、われわれは煩を厭わず、それをほぼ全体にわたって示しておこう。

### 「ノートⅠ」

ジャン・バチスト・セー『経済学概論』第3版、全2巻、パリ、1817年（21ページ）——この括弧内のページ数は、使用されたマルクスのノートのページ数を示す。以下、同様。

フレデリック・スカルベク『社会的富の理論』、パリ、1829年（2½ページ）。

J. B. セー『応用経済学全講』第3版、ブリュッセル、1836年（¼ページ）。

## 「ノートⅡ」

アダム・スミス『諸国民の富の本性と原因にかんする研究』、ジェルマン・ギャルニエによるフランス語への新訳、全5巻、パリ、1802年（24ページ）。

## 「ノートⅢ」

R. ルヴァスール（ドゥ・ラ・サルトゥ）『回想記』第1巻、パリ、1829年（5ページ）。

A. スミス著、ギャルニエ訳『諸国民の富』（11ページ）。

## 「ノートⅣ」

アテナイのクセノフォンからの抜粋（1½ページ<sup>\*</sup>）。——これは1845年、ブリュッセルで執筆。なお、この\*印のついた抜粋ノートは旧メガI/3には収録されていない。以下、同様。

デイヴィッド・リカードウ『経済学および課税の原理』、F. -S. コンスタンチオによるフランス語訳、第2版、全2巻、パリ、1835年（17ページ）。

ジェームズ・ミル『経済学綱要』、J. T. パリソによるフランス語訳、パリ、1823年（17ページ）。

## 「ノートⅤ」

ジョン・ラムゼイ・マカロック『経済学の起源、進歩、固有の対象および重要性にかんする講義』、G. プレヴォによるフランス語訳、ジュネーヴ、パリ、1825年（9ページ）。

DESTUETT・ドゥ・トラシ『イデオロギー要論』、パリ、1826年（3ページ）。

J. ミル著、パリソ訳『綱要（結論）』（6ページ）。

この「ノートⅤ」に「エンゲルスの論文『大綱』からの抜粋が紙片（ページづけはなし）に書いて挿入されている」（Vgl. ebenda, S. 411）。

## 「ノートⅥ」

ジェームズ・ローダーデール『公共の富の本性と原因にかんする研究』、E. ラジュンティ・ドゥ・ラヴェスによるフランス語訳、パリ、1808年（16ページ<sup>\*</sup>）。

## 「ノートⅦ」

カール・ヴォルフガング・クリストフ・シュッツ『国民経済学原理』、テュービンゲン、1843年（1ページ<sup>\*</sup>）。

フリードリッヒ・リスト『経済学の国民的体系』第1巻、シュトゥットガルト、テュービンゲン、1841年（半ば破れた17ページ<sup>\*</sup>）。

ハインリッヒ・フリードリッヒ・オジアンダー『通商、産業および農業の利益にかんする公衆の失望、あるいはリスト博士の工業力哲学の吟味』、テュービンゲン、

1842年（半ば破れたばらばらの紙片約3ページ<sup>\*</sup>）。

オジアンダー『諸国民の通商関係について』第1巻，シュトゥットガルト，1840年（1ページ<sup>\*</sup>）。

D. リカードウ著，コンスタンチオ訳『原理』（1ページ<sup>\*</sup>）。

「ノートⅧ」

著作集『18世紀の財政学者たち』ユーージェース・デール編ならびに解説，パリ，1843年からの抜粋。

- (1) ピエール・ル・ペザン・ドゥ・ボアギュベール『フランス詳論』（4½ページ）。
- (2) ボアギュベール『富，貨幣および貢納の本質にかんする論究』（10¼ページ）。
- (3) ボアギュベール『穀物の本性，耕作，商業および利益についての概論』（4ページ）。
- (4) ジョン・ロー『通貨および商業にかんする諸考察』（1ページ<sup>\*</sup>）。

「ノートⅨ」

ウージェース・ビュレ『イギリスとフランスの労働者階級の窮乏について』全2巻，パリ，1840年（24ページ<sup>\*</sup>）。

以上がマルクスの「パリ・ノート」の内容目録であるが，すでに示しておいたように，\*印のついた抜粋部分は旧メガ第Ⅰ部第3巻には収録されていない。だから結局，同巻には，「ノートⅠ」～「ノートⅤ」と「ノートⅧ」中のボアギュベール抜粋とが含まれている（ただし「ノートⅣ」中のフセノフォン抜粋を除く）ということになる。そして，これらのノートにかんして編集責任者のアドラツキーはその「序説」のなかで，『経哲草稿』との関連において次のようにいっている。

「エンゲルスが『資本論』第2巻への『序文』で確言しているように，マルクスは『自分の経済学研究を，偉大なイギリス人やフランス人のものから1843年にパリで始めた』のであった。この研究の最初の成果をありありと示しているのが，この巻の諸材料である。すなわち，労賃，資本利潤，地代，貨幣，等々についての，一部は断片的な諸論稿——それらをわれわれは『経済学・哲学草稿』としてまとめ，こうして初めて完全な形で印刷に付する。そしてさらに，古典的な国民経済学者たちの著作からの龐大な抜粋があるが，そのうちからわ

われわれは選択をして公表する。これらは上述の諸論稿〔つまり『経済学・哲学草稿』と直接関連して興味深く、その〔『経哲草稿』の〕直前の段階のものとして、それらはマルクスの仕事ぶりを特徴づける実例を提供するものである〕（Ebenda, SS. XII—XIII. 力点——アドラツキー、ゴシツク——引用者）。

アドラツキーのこの説明文によると、あたかも「パリ・ノート」が全体として『経哲草稿』の「直前の段階」に執筆されたものであるかのようであるが、この点については、われわれはのちに改めて問題にすることにして、ここではさしあたり引用文を示すにとどめておこう。

なお、私は「ノートV」の末尾に、エンゲルス「大綱」の摘要にかんする旧メガI/3編集部の文章を掲げておいたが、これは、アムステルダム<sup>・</sup>の社会史国際研究所での山中隆次氏の周到かつ綿密なオリジナル調査によって決定的に明らかになったように、「ノートV」の「マカロック『講義』からの抜粋が終っているオリジナル p.9 の裏に、問題の〈エンゲルス論文抜粋〉が、そのページ全体にわたって書きこまれている」（『『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係——ラーピン論文によせて——」、雑誌『思想』岩波書店、1971年11月号所収、113ページ）というのが事実である。思うに、これは旧メガの編集がマルクスのオリジナル原稿そのものに拠ってではなく、そのフォトコピーに基づいて行なわれたことによるものであろうが、いずれにしても旧メガ第I部第3巻の編集部がエンゲルス「大綱」の摘要を、あたかもそれが「紙片（ページづけはなし）」に書かれて「ノートV」に「挿入」されていたかのように注釈していることは、重大な誤認であったというほかはない。事実、それだからこそ、旧メガI/3では「経済学研究」（＝「パリ・ノート」）の冒頭にエンゲルス「大綱」の摘要を配することとなり、またその結果、<sup>（注）</sup>「パリ・ノート」および『経哲草稿』の研究にもさまざまな誤解や弊害をもたらすことになったのであった。だが、いまはこの点にもこれ以上、立ち入ることはしないでおこう。

（注） 東ドイツのマルクス＝レーニン主義研究所（さいきん、この研究所は「労働運動史研究所」と改称された）が中心となって編集・発行した新MEGAの第IV部第2巻では、このエンゲルス「大綱」の摘要は、ほぼ「ノートV」にあたる部分

（新メガでは「パリ・ノート」にかんしては「ノートⅠ」、「ノートⅡ」といった呼び名は使われていない）に、『独仏年誌』におけるエンゲルスとの見出しのもとで収録されている（Vgl. Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe, Vierte Abteilung, Band 2 (=MEGA<sup>②</sup>, IV/2), Berlin, 1981. SS. 485—487）。

さて、つぎに『経済学・哲学草稿』についてであるが、それがはじめて公刊されたのは、すでに明らかなように、「パリ・ノート」と同じく1932年、旧メガの第Ⅰ部第3巻においてであった。もともと、このノートの「束（Konvolut）」には何の表題もつけられていなかったのもあって、さきに引用したアドラツキーの説明文の前半部分からも知られるように（本誌7ページ参照）、その「束」に『経済学・哲学草稿』という表題をつけたのは、ヴェ・アドラツキーをはじめとする旧メガI/3編集部だったわけである。そして同編集部は、この『草稿』を「序文」、「第1草稿」、「第2草稿」、「第3草稿」および「第4草稿」という五つの部分に区分した。この間の事情について同編集部は『経哲草稿』全体への「まえがき」で次のように述べている。

「現存の四つの草稿の外的性質からしてそれらの断片的な性格がはっきりわかる。われわれは以下に、第1から第3までの草稿を印刷し、第4のヘーゲル抜き書きは付録に入れる。これらの各稿ごとに、われわれは短い外面的な記述をはじめに添えておく。第1から第3までの順序を立てるにあたっては、個々の草稿の推定成立期を基準にした。しかし例外として『序文』は、たしかに1844年8月より以前ではなく、つまり第1、第2と、そして第3の大部分よりものちに書かれたにちがいないのだが、しかしわれわれはこれを内容上の諸理由から全体の先頭に置くことにする。さらに、ヘーゲル哲学にかんする批判的補説は第3草稿中の三つの個所に挿入されているものであって、たしかにこの稿に含まれていた経済学上の論述と同時に成立したのだが、マルクスの『序文』から明らかなように、彼はこれを終章とするプランだったのであるから、一個所にまとめて最後に置くことにした」（Ebenda, S. 30. 力点——引用者）。

このように旧メガ編集部は、『経済学・哲学草稿』の内容をなすのは「現存の四つの草稿」だとしたうえで、『経哲草稿』のいわば本体を形づくるのは

「第1から第3までの草稿」であると見なして、「第4のヘーゲル抜き書き」＝「第4草稿」はこれらから切り離して「付録（Anhang）」に入れることにしたわけである。そして同編集部は、「第3草稿」への「外面的な記述」末尾で、あらためてこの「第4草稿」にかんして次のように説明している。——「この束のなかにはまだ、明らかに後から縫い込まれた1枚のフォリオ全紙<sup>ホーゲン</sup>があって、その各面は、ほかのと違って一本の縦線で二つの欄に分けられている。これは一つの独立した草稿（Nr. IV）であって、しかもヘーゲル現象学からの抜き書きだから、われわれはこれを付録に入れることにした」（Ebenda, S. 106）。

こうして旧メガ I/3 編集部は、「ヘーゲルからの抜き書き」をひとたびは「第4草稿」だと見なしながらも、それは「一つの独立した草稿」であり「しかもヘーゲル現象学からの抜き書きだから」という理由で、結局、それを『経哲草稿』本体から分離して第I部第3巻の巻末の「付録」に入れたのであった。これはおそらく、「ヘーゲルからの抜き書き」が——マルクスによる若干の省略や加筆があるとはいえ——『精神現象学』最終章「絶対知」からのたんなる抜粋に近く、この点、「第1草稿」～「第3草稿」とは性質が異なっていると判断して、旧メガ編集部がとった措置のように思われるが、やや中途半端な取り扱いだったといわざるをえない。<sup>(注)</sup>

(注) ちなみに、新メガでは、このヘーゲル抜粋は、『経哲草稿』の「第4草稿」＝「付録」としてではなく、『草稿』の末尾をなす「断片」中に「ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル『精神現象学』【絶対知】章の摘要」という表題のもとに第I部第2巻に収録されている（MEGA<sup>②</sup>, I/2, SS. 439—444）。ところが、同じヘーゲル抜粋が、新メガの第IV部第2巻にも「パリ・ノート」の一部をなすものとして「ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル『精神現象学』からの抜粋」という見出しで収録されている（MEGA<sup>②</sup>, IV/2, SS. 493—500）。この点に言及しながら、渋谷正氏は、その論文「『経済学・哲学手稿』とパリ・ノートをめぐらる問題」のなかで次のように述べておられるが、これは、けだし、傾聴に値する所論だといふべきであろう。「……また、新MEGA第IV部第2巻が『パリ時代の諸資料に属する』ものとして収録したヘーゲル『精神現象学』最終章からの抜粋が、同第I部第2巻にも収められ、それぞれに『成立と来歴』が付されるといった重複もある。執筆順序の確定は、経済学研究開始時におけるマルクスの

理論的發展を正確に把握するために避けがたい問題であるが、新MEGA 両巻の刊行は、この問題の考察のために豊富な資料を提供するとともに、慎重な検討を要すべき新たな問題をも提示しているといえよう」（雑誌『経済』1983年8月号、172ページ）。

なお渋谷氏は、上に引用した文章の直前で、新メガ編集部にたいして次のような苦言を呈しておられるが、私には、これもまことに尤もな主張だと思われる。——「新MEGA への『経済学・哲学手稿』の収録にあたって、編集部内に解釈および編集方針をめぐる見解の相違があったことは、はやくに知られていたが、この相違が、とくに『経済学・哲学手稿』とパリ・ノートとの執筆順序の推定にさいして表面化することになったといつてよい。……新MEGA の第I部第2巻と第IV部第2巻とのあいだに推定上の異同があるばかりではなく、第IV部第2巻の内部にも齟齬が認められるのである。新MEGA の刊行にさいして最終的に解釈上の差異が残ったのはやむをえないものとしても、それぞれの推定の提示にあたって異論にたいする言及があつてしかるべきで、各巻で別様の推定を並立するだけではいたずらに読者を混乱させるだけであろう」（同上）。

それはそれとして、ここでわれわれは次の点に留意すべきである。すなわち、「第3草稿」への「外面的な記述」からのさきの引用文のなかに、「……第1〔草稿〕から第3〔草稿〕までの順序を立てるにあたっては、個々の草稿の推定成立期を基準にした」という文章があつた点が、それである。問題の所在を明らかにするために、われわれはここで『経済学・哲学草稿』の「目次」を——旧メガ編集部がつけた見出しも含めて——示しておけば、つぎのとおりである。

序文

「第1草稿」

労賃

資本の利潤

- 1 資本
- 2 資本の利得
- 3 労働にたいする資本の支配および資本家の動機
- 4 資本の蓄積と資本家間の競争

地代

〔疎外された労働〕

「第2草稿」

〔私的所有の関係〕

「第3草稿」

〔私的所有と労働〕

〔私的所有と共産主義〕

〔欲望、生産、分業〕

〔貨幣〕

〔ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判〕

上記のうち二種の括弧「 」および〔 〕内の見出しはすべて旧メガ編集部によるものであるが、さしあたりの問題は「第1草稿」である。これにかんして同編集部がつけた「外面的な記述」は次のようなものであった。

「第1草稿は九枚のフォリオ全紙<sup>ボーゲン</sup>（18葉、36面）の束から成り、マルクスは、ローマ数字でページづけ（I～X X X VI）をして、これを一冊のノートにまとめている。どのページもすべて、まだ本文を書くまえに二本の縦線を引いて三つの欄に区分されており、たいていの場合、つぎのような表題がつけられている（左から右へ）。——『労賃』、『資本の利潤』、『地代』。これらの表題も、同じく本文よりも以前に書きつけられたもので、ほとんどすべてのページで同じである。それゆえ想定されうることは、マルクスは三つのテーマのおのおのにはほぼ同じ長さの論述をあてようと意図していたということである。けれども、この計画された平行〔的記述〕は、のちにはしばしば妨げられて中断されたように見える。X X II ページからは、この三欄分けも表題もすっかり意味を失ってしまい、本文は三つの欄すべてにまたがってかまわず書き続けられており、われわれは、その内容にしたがって『疎外された労働』という表題をつけた。第1草稿はX X VI ページで中断されている」（Ebenda, S. 38）。

「第1草稿」<sup>(注)</sup>についてのこの「外面的な記述」は、かならずしも正確なものではないといわざるをえないが、その点は措くとして、序文と「第3草稿」末尾のヘーゲル批判の部分とを除いて、「第1草稿」から「第3草稿」までの順序立ては「個々の草稿の推定成立期」を基準になされたというさきの言明と、この「第1草稿」への「外面的な記述」の内容とを念頭に置きながら、上の「目次」を眺めてみると、「第1草稿」は次のような順序で執筆されたと考えて

差しつかえない、ということになろう。すなわち、マルクスは「第1草稿」をまず「労賃」欄から書きはじめ、その欄を書きおえたのちに「資本の利潤」欄の執筆に移り、その欄を書きうすめてから、こんどは「地代」欄にとりかかり、そして最後にX X II～X X VIIページの〔疎外された労働〕部分を書いた、というふうに。また事実、旧メガI/3では『経哲草稿』の「第1草稿」がこのとおりの順序で印刷されており、この点についてさきの「外面的な記述」以上の格別の注釈はまったくなされていなかったのである。そこで、「第1草稿」にかんする上記のような執筆順序が、ごく当然のこととして、一般読者のいわば固定観念にまでなっていたのであった。そして、まさにこの点で一石を投じたところに、「ラーピン論文」のメリットの一つがあったといえよう。

（注）新メガ第I部第2巻では、『経済学・哲学草稿』にかんして、旧メガでの「第1草稿（das Manuskript Nr. I）」、「第2草稿（das Manuskript Nr. II）」といった呼称を廃して「ノートI（Heft I）」、「ノートII（Heft II）」というふうに呼んでいるが（Vgl. MEGÄ, I/2, SS. VI—VII）<sup>②</sup>、本稿では、これまでにすでに使っている「パリ・ノート」の呼称と区別するため、従来の慣例どおり「第1草稿」、「第2草稿」といった呼称を使うことにする。

なお、ここで旧メガI/3における『経哲草稿』の「第2草稿」と「第3草稿」とへの「外面的な記述」を必要ながぎりで引用しておこう。

「第2草稿」——「第2草稿は全部で1全紙<sup>ボーゲン</sup>（2葉、4面、X X X X—X L IIIページ）から成っていて、文章の途中から始まっており、明らかにこれは、失われた一冊の終りの断片をなしている」（MEGÄ, I/3, S. 96）<sup>①</sup>。

「第3草稿」——「第3草稿は、折り重ねられた17枚の全紙<sup>ボーゲン</sup>（34葉、68面）からなる分厚い一冊である。マルクスのページづけはX X IからX X IIIへとんでおり、またX X IVからX X VIへとんでいる。最後の23面は空白である。／この草稿は、失われた本文<sup>テキスト</sup>への二つの補遺で始まる。これらにわれわれは『私的所有と労働』および『私的所有と共産主義』という表題をつけた。第2の補遺の哲学的・経済学的論述につながりながらヘーゲル哲学の批判が続いているが、われわれは、これをより出して終りにまとめて入れた。この束のなかにはまた、X X X I X—X L ページに『序文』が見いだされるが、これは全体の冒頭に置いた。この『序文』に続いてX L I—X L III ページに、もう一つの独立した付説があるが、これは直接にはどの断片にもつながらない。これにわれわれは『貨幣』という表題をつけた」（Ebenda,

S. 106)。

### 〔3〕 ローゼンベルクの先駆的研究

以上、われわれは、旧メガ第Ⅰ部第3巻で初めて公刊された「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の内容をひとつお概観してきたが、同巻の公刊いらいマルクスのこれらの遺稿、とくに『経哲草稿』は、国の内外の多くの哲学者、思想史家および経済学者によってとりあげられ、わけでも「疎外論」を中心として、さまざまな角度から論議され、研究されてきた。こうした研究は、細見英氏によると、つぎの三つの部類の研究、すなわち①「思想的視角からの研究」——K. レーヴィット、H. マルクーゼ、G. ルカーチ、R. O. グロップらの見解、②「『資本論』との方法的・体系的関連の究明を主眼とする」もの——梯明秀氏、清水正徳氏らの研究、③「『草稿』の経済学的意義・内容を追究する」もの——デ・イ・ローゼンベルク、W. ヤーン、遊部久蔵氏らの研究、という三つの流れの研究に区分されうる（<sup>注</sup>細見英「〈疎外された労働〉の概念(1)——諸研究の概観と課題の設定」、本誌『立命館経済学』第9巻第1号、1960年4月、のち同氏『経済学批判と弁証法』未来社、1979年所収、とくに後者71—74ページ参照）。

（注） なお細見氏は、当時（つまり1960年頃）の第3の部類に属する研究文献として、重田晃一氏の論稿「初期マルクスの一考察——経済学批判への端緒としてのジェームズ・ミル評注を中心として——」（関西大学『経済論集』第8巻第6号）のほかに、

杉原四郎「マルクス経済学の定礎」（同氏『ミルとマルクス』第2章）

松田弘三「労働価値論と史的唯物論の成立」（同氏『科学的経済学の成立過程』第8章）

長洲一二「マルクスのスミス批判」（高島善哉編『スミス国富論講義』第5巻所収）

大島清「マルクス『経済学に関する手稿』について」（玉城・末永・鈴木編『マルクス経済学体系』上巻所収）

などを列挙しておられる（細見，前掲書，112ページ）。

ちなみに，上掲の細見論文は，やや古くなったとはいえ，1932年に旧メガで「パリ・ノート」および『経哲草稿』が発表されていらい1960年当時到现在までの，内外の諸研究を広範に，しかも的確に整理したものとして出色のものというべきであろう。

さて私は，細見氏のいう第3の部類のものを，以下，主として執筆順序の問題に焦点を合わせながら，とりあげてゆくことにしよう。われわれはまず，この分野で先駆的研究をおこなったデ・イ・ローゼンベルクの遺著『19世紀40年代におけるマルクス＝エンゲルスの経済学説の発展の概要』（Д. И. Розенберг, Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века, Москва, 1954г. 副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』初版，大月書店，1957年，改訳版，上・下巻，1971年。なお以下，邦訳ページ数は改訳版で示す）をとりあげることとする。

はじめにローゼンベルグが，「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の執筆順序をどんなふうに考えていたかを知るために，ここでこの書物の「目次」の一部（第3章～第5章）を示しておけば，以下のとおりでである。

### 第3章 経済学者からの抜粋にたいするカール・マルクスの批判的評注

- 1 セーからの抜粋にたいする評注
- 2 アダム・スミスからの抜粋にたいする評注
- 3 リカードウからの抜粋にたいする評注
- 4 ジェームズ・ミルからの抜粋にたいする評注
- 5 私的所有の批判

### 第4章 カール・マルクスの『経済学・哲学草稿』

- 1 草稿の簡単な特徴づけ
- 2 賃金，利潤，地代にたいするマルクスの分析
- 3 経済学とブルジョア的關係との批判

### 第5章 カール・マルクスの『経済学・哲学草稿』（つづき）

- 1 断片「私的所有の關係」
- 2 断片「私的所有と労働。重商主義者，重農主義者，アダム・スミス，リカードウおよび彼の学派の見解」
- 3 断片「私的所有と共産主義」

## 4 断片「欲望、生産、分業」

この「目次」を一見して気づくことは、ローゼンベルクが「バリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』とを、それぞれに独立した、ひとまとまりのものとして扱っており、しかも執筆順序の点でいえば、概してマルクスは前者から後者へと執筆をすすめていったものと彼ローゼンベルクは考えていたのではないか、ということである。だが、われわれは「バリ・ノート」についてローゼンベルク自身が述べている点をもっと立ち入って見てゆくことにしよう。彼は、抜粋や要約がなされている経済学者たちは「つぎの順」、すなわち「(1)ジャン・バチスト・セー、(2)フレデリック・スカルベク、(3)アダム・スミス、(4)デイヴィッド・リカードウ、(5)ジェームズ・ミル、(6)マカロック、(7)デステュット・ドゥ・トラシ、(8)ポアギュベール<sup>(注)</sup>」の順で並んでいるとしたうえで、つぎのようにいっている。——「マルクスが前記の経済学者たちをちょうどこの順序で研究していたという直接の指摘はない。抜粋ノートには日付けが書いてない。例外はポアギュベールからの抜粋ノートで、これには『1845年』と書いてある。だが、このノートを最初のもつと見ることはできない。このノートよりさきに他のいくつかのノートがあったことはたしかである。すでに1844年中にマルクスは経済学の諸労作を熱心に研究したこと、そして彼の習慣にしたがって、そのばあい抜粋をおこなったことは、完全に確証されている。このことから、ポアギュベールからの抜粋以前にセー、スミス、リカードウからの抜粋がなされ、そしてそれらの抜粋は1844年のものであると見なす根拠がある」(M.И. Розенберг, Очерки развития экономического учения., стр. 61-62. 前掲訳書, 上巻, 90ページ)。

(注) ここにはローゼンベルク自身が次のように、すなわち「これで著者の名が全部あげられていると考えることはできない。一部の抜粋ノートは保存されていないのかも知れないし、そのうえ、マルクス＝レーニン主義研究所も、全部の抜粋を公刊したわけではないと断わっている」(Там же, стр. 61. 前掲訳書, 90ページ)と注記している。

ここでローゼンベルクがなぜポアギュベール抜粋の作成を1845年と特定した

のか、その詳細な根拠は示されていないが、それはともかく、こうしてローゼンベルクはボアギュベールを考察の圏外に置き、われわれが以前に見た「パリ・ノート」中「ノートⅠ」～「ノートⅤ」を、とくにセー、スミス、リカードウ、ジェームズ・ミルを重点的に考察するわけである。

しかし、ここでわれわれは、エンゲルス「国民経済学批判大綱」の摘要についてローゼンベルクがどのように考えていたかを見ておこう。たとえば彼は次のようにいっている。「経済学者の著作からの抜粋のまゝに、マルクスはエンゲルスの『大綱』の簡単な概要を置いている。これも偶然なことではない。マルクスは評注の大部分でエンゲルスのあとを追っており、ときには逐語的にすらそうしている。これらの評注はすべて、エンゲルスの『大綱』を一本の赤い糸として貫いている一つの思想——経済学は虚偽の基礎に、すなわち、私的所有がゆるぎないことを認めることに、立脚しているという思想——によって滲透されている」（Там же, стр. 64. 前掲訳書, 94ページ。力点——引用者）。ローゼンベルクはまた、こうもいっている。「すでに指摘したように、マルクスは抜粋のまゝに、彼が作成したエンゲルスの『大綱』の概要を置いている。この概要は同時に、ある程度マルクスの批判的評注の序論でもあり、また、彼がとくに初期に、評注をつけるにあたって堅持したプランでもある」（Там же, стр. 65. 前掲訳書, 95ページ。力点——引用者）。

「パリ・ノート」の作成にあたってマルクスがエンゲルス「大綱」から強い影響をうけたことは、たしかである。しかし、ここでローゼンベルクが、「経済学者の著作からの抜粋のまゝに、マルクスはエンゲルスの『大綱』の簡単な概要を置いている」とか、「マルクスは抜粋のまゝに、彼が作成したエンゲルスの『大綱』の概要を置いている」とか述べるのはどうであろうか。なるほどローゼンベルクは、「置いている」という表現を使っており、「書いている」という言い方は避けているかのようである。しかし、彼が上のように立言する場合には、それは、われわれがすでに前節で見ておいたように、旧メガ第Ⅰ部第3巻の編集部が、「紙片（ページづけはなし）に」書いて「ノートⅤ」に「挿入」されていたとするエンゲルス「大綱」の概要を「パリ・ノート」全体の冒頭に

配していた、という事情によるものであり、そうした事情の反映であったともいうほかあるまい。それにしてもローゼンベルクが、エンゲルス「大綱」の「概要」は「ある程度マルクスの批判的評注の序論であり」云々とか、「マルクスは評注の大部分でエンゲルスのあとを追っており、逐語的にすらそうしている」とまでいうのは、いささか独断的にすぎると評さざるをえない。

なお、ここでローゼンベルクが、マルクスは「逐語的にすら」エンゲルスのあとを追っていると述べる場合には、上掲引用文のすぐあとで引用されている「ノートⅠ」中のセー抜粋、たとえば「私的<sup>・</sup>所有<sup>・</sup>は一つの事実である。この事実を基礎づけることは国民経済学の関知するところではないが、この事実こそ国民経済学の基礎をなすものである。／私的<sup>・</sup>所有<sup>・</sup>がなければ富<sup>・</sup>はない。国民経済学は、本質上、致富<sup>・</sup>学である。だから、私的<sup>・</sup>所有<sup>・</sup>がなければ経済学〔politische Ökonomie〕はない。全国民経済学は、だから必然性のない事実に基づいている」という抜粋を念頭に置いているようである（См. там же, стр. 65—66. 前掲訳書, 95—96ページ参照。力点——マルクス）。しかし、エンゲルス「大綱」の「概要」には、こういう文章はそのままの形では見られないのであって、マルクスの上掲セー抜粋の文章（評注）は「大綱」の最初の部分をマルクスが自分流に要約したものと見なすべきであろう。

さて、さきに引用したように、ローゼンベルクは、「ボアギュベールからの抜粋以前にセー、スミス、リカードウからの抜粋がなされ、そしてそれらの抜粋は1844年のものと見なす根拠がある」としていたが、この「パリ・ノート」について彼は、さらに次のように書いている。——「マルクスの批判的評注は、セーとスミスからの抜粋には少なく、リカードウからの抜粋にはかなり多く、ジェームズ・ミルからの抜粋にはさらに多い。おそらくは、まさにこの順序で抜粋そのものもおこなわれたのであろう。すなわち、マルクスはまずはじめにセーとスミスを研究し、ついでリカードウを研究したのであろう。とつとも、すでに指摘したとおり、そうだという明白な指示はない。だが、この想定に有利な事実がある。それは、リカードウとミルからの抜粋にたいする評注は、数が多いばかりでなく、あとで見るように、内容がずっと豊富で分析も深く掘り

さげられている、ということである」（Там же, стр. 63-64. 前掲訳書, 93ページ）。

この一文から知られるように、ローゼンベルクは、「セーとスミスからの抜粋」と「リカードウとミルからの抜粋」とでは、それらに付けられたマルクスの評注の数に違いがあるだけでなく、その「内容」および「分析」の点でもはっきりと相違があることを指摘しているのである。この点を確認するために、リカードウ抜粋とミル抜粋にかんするローゼンベルクの特徴づけを、下にそれぞれ一文づつ引用しておこう。

「リカードウからの抜粋は、セーとスミスからの抜粋とはいちじるしく異なる別の性格をもっている。マルクスはリカードウの『原理』を、セーがリカードウと論争しながら注積をつけたフランス語訳で読んだ。それで、あたかもマルクスがこの論争に参加しているかのようになっている。彼はリカードウの『原理』からの抜粋に、しばしばセーの注積からの抜粋を対置している。／批判的評注もいちじるしく改まった。評注の数が多くなって内容がより豊富になったほか、形式の点でも、それは断片的でなくなった」（Там же, стр. 67. 前掲訳書, 99ページ。力点——引用者）。

「この批判的評注〔いわゆるミル評注〕は、別個に扱うべきものである。第1に、それは、われわれがすでに考察してきた評注〔セー、スミスおよびリカードウの評注〕とくらべて、それぞれの問題の分析が完全で徹底的であるという特色があるし、第2に、これがとくに重要なことであるが、それはもはやばらばらな評注でもなければ、本を読んでいるときに頭にうかんだ考えの素描でもない。それらの評注は一定の順序を追って叙述され、たがいに補足しあい、発展させあっている。それからの抜粋は、マルクスにとっては、それが触れた問題を研究する動機および出発点となっているにすぎない」（Там же, стр. 78. 前掲訳書, 115ページ。力点——引用者）。

これらの文言からしてわれわれは、ローゼンベルクが、抜粋ノートの作成順序は、セー→スミス→リカードウ→ミルだと考えていたこと、しかもリカードウ抜粋は「セーとスミスからの抜粋とはいちじるしく異なる別の性格」のものであり、さらに「ミル評注」はこのリカードウ抜粋とくらべても一段と高い理

論水準のものになっていると解していたことを知りうるであろう。このように抜粋ノートは、セー→スミス→リカードウ→ミルという時間的順序で作成され、いずれも1844年につくられたものであるにしても、セー＝スミス抜粋ノートとリカードウ抜粋ノートとのあいだには、また後者とミル抜粋ノートとのあいだには、形式的にも内容的にも大きな変化があることをすでに察知していた点、さすがにローゼンベルクだというべきであろう。<sup>(注)</sup>

(注) なおローゼンベルクは、「パリ・ノート」について、「もちろん、もっとも貴重なのは抜粋へのマルクスの批判的評注であるが、しかし抜粋そのものも大きな興味をあたえる」として、ひきつづき次のように記しているが、これは示唆的で有益な指摘だといってよかろう。「たとえば、『諸国民の富』からの抜粋では、スミスが五つの篇で発展させた経済理論全体が叙述されている。みごとな腕まえて作成されたマルクスの綱要のなかには、スミスの大作の精髓があたえられている。その他の著名な経済学者からの抜粋も、同様である。だが、この種の抜粋とならんで、これとはちがった抜粋もある。そこでは、すでに以前に表明された考えの補足としてか、あるいはその考えの変案として、個々の命題が引用されているにすぎない。セーの著書『経済学論考』（“*Traité d'économie politique*”）を叙述するさいに、マルクスはいくつかの引用をするだけにとどめている。そして同じ著者のもう一つの、もっと大冊の著書『経済学完全教程』（“*Cours complet d'économie politique*”）からは、『論考』のなかにはないか、あるいは、そこでは十分明瞭には定式化されていないことだけが引用されている。スカルベクやデステュット・ドゥ・トランからの抜粋も、この種に属する。この種の抜粋は少ないが、その抜粋のなかには、これらの著述家にとって特徴的なものが示されている」（*Там же, стр. 62-63. 前掲訳書, 91—92 ページ*）。

ついでながら、ここでローゼンベルクは「たとえば、『諸国民の富』からの抜粋では、スミスが五つの篇で発展させた経済理論全体が叙述されている」（力点——引用者）云々と述べ、あたかもマルクスが『諸国民の富』の第5篇にかんしても抜粋をおこなっているかのようになっているが、これは厳密に言えば正確ではない。なぜなら、マルクスはこの第5篇については、その表題「主権者または国家 (*la république*) の収入について」だけを記すにとどめ、そこからの抜粋はおこなっていないからである。なお、この点については、MEGA<sup>①</sup>, I/3, S. 492. MEGA<sup>②</sup>, IV/2, S. 386. および山中隆次氏の論稿「初期マルクスの経済学研究(Ⅱ)——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に(その3)

——」（中央大学『商学論纂』第28巻，第2号，185ページ）を参照されたい。

さて，すでに見たように，ローゼンベルクは，ボアギュベール抜粋を除く「パリ・ノート」の執筆時期を1844年とするのだが，彼は『経済学・哲学草稿』にかんしても，旧メガI/3編集部の推定にしたがいながら，その執筆時期を1844年とする。——「この草稿がいつごろ書かれたかを示す正確な資料はない。マルクス＝レーニン主義研究所編集部の推定によれば，この草稿は1844年のものである」（Там же, стр. 97. 前掲訳書，142ページ）。

つまり，ローゼンベルクは「パリ・ノート」も『経哲草稿』も，ともに1844年執筆のものとするわけである。そして，つい今しがた見たように，彼は，リカードウ抜粋とミル抜粋はセーヤスミスからの抜粋にくらべると格段に理論水準が高くなっていると確言するのだが，しかし彼は，そうした点からこれらの抜粋の執筆時期をあらためて検討しなおそうとはしないし，また，それらと『経哲草稿』（いま「第4草稿」＝「付録」を別とすれば，それは「第1草稿」，「第2草稿」および「第3草稿」から成る）との執筆順序の問題を立ち入って再検討しようともしない。察するに，この点ではローゼンベルクは旧メガ第I部第3巻の編集責任者アドラツキーの，すでに以前に言及しておいた推定にそのまま従っていたようである。念のため，かの「序説」を必要な部分に限ってもう一度示しておく，アドラツキーは「パリ・ノート」とくに「ノートI」～「ノートV」について，「これらは上述の諸論稿〔つまり『経哲草稿』〕と直接関連して興味深く，その直前の段階のものとして，それらはマルクスの仕事ぶりを特徴づける実例を提供するものである」（前出，力点——引用者）としたのであった。

要するにローゼンベルクは，アドラツキーと同じく，「ノートI」～「ノートV」全体（ただし「ノートIV」中のクセノフォン抜粋は除く）を『経哲草稿』全体の準備のための抜粋ノートとしてとらえ，したがって執筆順序も，『草稿』は総じて抜粋ノートよりもあと，というふうに考えていたわけである。事実，ローゼンベルクは，前掲書第3章の「5 私的所有」，すなわち第4章で『経哲草稿』を考察する少し前のところで，つぎのように書いている。——「人間

としての人間の活動は、生活のための手段であるばかりでなく、生活そのものの直接の発現であり、能動的・創造的な過程である。生産物のうちには個人的および類的生活が体现されているから、生産物は個々の個人のものではなく集団全体のものである、とマルクスは考えた。／これが、ミルへの評注のなかで、またその後、あとで見るように『経済学・哲学草稿』のなかで、マルクスがとくに力をこめて発展させた一環の思想である」（Там же, стр. 89. 前掲訳書, 131ページ。力点——引用者）。

この文章からわれわれは、ローゼンベルクが執筆順序の点で『経哲草稿』は「ミルへの評注」よりもあとだとしていたことを、読みとることができよう。つまりローゼンベルクは、「ノートⅠ」から「ノートⅤ」までを書いてから、マルクスは『経哲草稿』「第1草稿」の執筆にとりかかったと考えていたわけである。そして、その『経哲草稿』「第1草稿」についてローゼンベルクは、つぎのようにいっている。

「経済学にかんする草稿を、マルクス＝レーニン主義研究所のドイツ語版に発表されている順序で考察しよう。この順序にしたがって、マルクス自身が『賃金』という表題をつけた草稿からはじめよう。なるほど、ここには利潤や地代の問題についても貴重な意見が少なからずあるが、しかしそれらは、賃金そのものの分析に必要なかぎりでは触れられているにすぎない。賃金は、被搾取階級の所得として、搾取階級の所得、すなわち利潤および地代と対立するものである。だから賃金の特徴的な特質は、あとの二者と対比することによってはじめて、もっとも完全に明らかにすることができる」（Там же, стр. 99. 前掲訳書, 144ページ。力点——引用者）。

すでに前節で見ておいたように、『経哲草稿』「第1草稿」を旧メガ第Ⅰ部第3巻でのように編集・印刷すると、「第1草稿」はまず「労賃」欄から書き始められ、その欄を最後まで書いたのちに、マルクスは「資本金」欄の執筆に移り、その欄を書きうすめてから「地代」欄へ、そして最後にXXⅡ～XXⅦページの〔疎外された労働〕部分を書いた、というふうに読者には考えられがちである。が、ローゼンベルクがここで「マルクス自身が『賃金』という表題

をつけた草稿」について語る場合には、あたかも「賃金」という見出しのついた独立の草稿があるかのように思われて、マルクスのオリジナル原稿が縦線による三欄分割ないし二欄分割などの形で書かれている点が忘れられることにもなりかねない。しかもローゼンベルクは、「第1草稿」前半部分で問題なのは「賃金そのものの分析」であって、「利潤や地代の問題」はこの賃金分析に「必要なかぎりで触れられているにすぎない」と言明する。彼がこのように言明するのは、おそらく、「利潤」欄や「地代」欄にはスミスらからの引用文が多いのになら、賃金」欄はとくにその前半部分では、ほとんど引用がなく、マルクス自身が書いているように見える（実際には『国富論』からの要約が多いのだが）という事情によるのであろう。だが、それにしても、ローゼンベルクのこうした言明に接すると、彼自身が、マルクスのオリジナル原稿にかんする旧メガ I/3 編集部の説明を十分に理解し、かつ、それを念頭に置いたうえで「第1草稿」前半部分を読んでいたのだろうかという疑念を抱かざるをえないといえれば、これはいい過ぎになるだろうか。

ところで細見英氏は、前掲論文でローゼンベルクの疎外論を検討したい、ローゼンベルクは〈疎外された労働〉の概念にマルクスが与えた諸規定を逐次解説しながらも、この概念の第3の規定としてマルクスがあげているもの、すなわち『人間の類からの疎外』をまったく無視して、これについては一言もふれていない」として、さらに「ローゼンベルクは『類からの疎外』という哲学的表現とともに、それによって表現されているはずの現実的な内容をも除去しているのであって、これはタライの水といっしょに赤ん坊まで流してしまうたぐいの態度といわねばなるまい」（前掲書、107—108ページ）と手厳しく批判している。が、それにもかかわらず、細見氏は、他方では「この書物〔われわれがこれまでとりあげてきたローゼンベルクの書物〕は、1840年代におけるマルクス・エンゲルスの知的発展の過程を経済学者の立場からあとづけた労作としてユニークなものであり、とりわけこれまでほとんど問題にされなかったパリ時代のマルクスの経済学ノートにかなりのページをさいてこれを紹介していることは、ひとつの功績であるといえよう」（前掲書、104—105ページ）と高く評価

している。私も、これまで見てきたように、ローゼンベルクのこの書物には若干の批判的見解を表明せざるをえないのだが、それにもかかわらず、私は、この書物にかんする細見氏のこうした高い評価に全面的に賛意を表したいと思う。

#### 〔4〕「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の邦訳

さて、ここでわれわれは、しばらく執筆順序の問題から離れることになるが、「パリ・ノート」および『経済学・哲学草稿』の邦訳書について言及しておこう。

はじめに「パリ・ノート」の邦訳書を取りあげると、これは1962年12月、杉原四郎・重田晃一両氏の手で『マルクス・経済学ノート』と題して未来社から出版された。この邦訳は、旧メガ第Ⅰ部第3巻で公表された「パリ・ノート」の部分を底本とするものだが、その全訳ではなくて「重点的な抄訳」である。この点にかんして共訳者の一人・杉原四郎氏は、その「概説」への「補説（訳者）」において次のように記しておられる。「MEGAはこのノート〔「現存するパリ時代の抜粋ノート」〕のうち、ビュレ、ローダーデール、ロー、リスト、オジアンダー（2種の著書）、シュッツ、クセノフォン（5種の著書）の著書合計12種からのマルクスの抜粋はその内容の簡単な紹介にとどめ、全文の活字化を省略している。われわれの以下の紹介は、MEGAにその全文を活字化された抜き書きの中から、さらに、ルヴェスール、セーの『全講』の二書からの抜き書きについては、これを省略し、以下、エンゲルス、セー（『概論』）、スカルベク、スミス、リカードウ、ジェームズ・ミル、マカロック、トラシィ、ポアギュベールの九人の著書からのマルクスの抜き書きの紹介だけをおこなうことにする。それはMEGA. I. 3のZweiter Teil: Aus den Exzerptheften, Paris, Anfang 1844-Anfang 1845の中のÖkonomische Studien (p. 435-583)にあたる部分であるが、この場合もMEGAにしたがってその全貌を完全に翻訳するのは、ジェームズ・ミルに関するノートだけで、それ以外のものについては、忠実な全

訳ではなく、訳者の解説をまじえた重点的な抄訳である」（杉原四郎・重田晃一訳『マルクス・経済学ノート』未来社、1962年、25—26ページ）。

見られるように邦訳『マルクス・経済学ノート』は、「パリ・ノート」全体の「忠実な全訳」ではなく、われわれが以前に旧メガ I/3 にしたがって「パリ・ノート」の内容目録一覧として列挙した九冊のノートのうち、「ノートⅠ」～「ノートⅤ」と「ノートⅧ」中のボアギュベール抜粋と（ただし「ノートⅣ」中のクセノフォン抜粋を除く）の「重点的な抄訳」<sup>（注）</sup>であるが、この訳書については次の二点が特筆されるべきであろう。すなわち、この訳書では、ほとんどすべてのページに、丹念な文献考証的研究に裏打ちされた訳者たちの懇切丁寧な脚注が付されていること、および、巻末には詳細で、しかも当を得た「訳者解説」が付けられていることが、それである。こうして本訳書は、旧メガ第Ⅰ部第3巻を底本とせざるをえなかったという事情からくる制約——たとえばエンゲルス「大綱」からの摘要の配置問題など——を別とすれば、「パリ・ノート」の邦訳書として極めて優れたものになっている、と行ってよかろう。なお、この訳書は、「『経済学ノート』の諸版と諸解釈——第2版へのあとがきにかえて——」という補説を付して、1970年11月に再版された（本稿では『経済学ノート』の引用ページ数は、すべてこの増補再版のものである）。

（注）『経済学ノート』の「訳者はしがき」にも記されているように（前掲訳書、2ページ）、これらの「ノート」のうち、いわゆる「ミル評注」の部分の翻訳はすでに1961年10月に、細見英氏によって「J. ミル『政治経済学綱要』への批判的評注——マルクスの最初の経済学研究より——」という表題のもとで本誌『立命館経済学』第10巻第4号で公表されていた。なお、この邦訳は1975年3月、改訳のうえ、「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』（J. T. パリソ訳、パリ、1823年）からの抜粋」との題名のもとに『1844年の経済学・哲学手稿』の直前の位置に配されて『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻、大月書店に収録された。

ちなみに、ここでわれわれは、「ミル評注」を含む「パリ・ノート」全体について、それが『経哲草稿』とともに旧メガ I/3 に収録されることになった経緯を説明した杉原四郎氏の文章を引用しておこう。いささか長くなるが興味深い叙述なので、あえて引用することにしよう。氏は前掲訳書「概観」への「補説（訳者）」において次のように書いておられる。

「ところでこの読書ノート〔「パリ・ノート」〕は多年『社会民主党文庫』の中に入らずもれたままであったが、1920年モスクーで創立された『マルクス・エンゲルス研究所』のリュザーノフは、マルクスとエンゲルス関係の文献をできるだけ蒐集するという研究所の使命をはたすために、ベルリンの『社会民主党文庫』を徹底的に調査し、その結果、従来かえり見られなかったこのノート類がマルクス主義の研究にとって非常に重要な資料であることを発見した。そこで彼はこの資料を写真に取ってモスクーへもちかえり、彼の編集の下に1929年から公刊されはじめた『マルクス・エンゲルス全集』（Marx-Engels Gesamtausgabe）の第一部に、マルクスの手稿類（Manuskripte）とともにこのノート類（Exzerpthefte）をも収録して、その全貌をできるだけ忠実に再現する方針をたてた。このようにしてマルクスの読書ノートは、MEGAの刊行とともに、はじめて公けにされ、研究者の共有財産となることになったのである。／リュザーノフはMEGA. I. 1の1（1929）の序文の中で、抜き書きの重要性とMEGAにこれを採録する場合の基本方針を説明し、1840—1843年の間にかかれた抜き書きを本文で紹介しているが、やがて彼自身ソ連内部の政争に連坐して失脚、MEGAの編集長もアドラツキーが交代することになる。しかし全集の進行とともにノートの公刊は大体リュザーノフのたてた方針にしたがってつづけられ、I, 3（1932）には1844—1845年のパリ時代のノートが、I, 6（1932）には1845—1847年のブリュッセル時代のノートが紹介されている。だがナチスの政権獲得によってMEGAのベルリンでの刊行そのものが中絶のやむなきにいたり、1850年代以降のノートの紹介を継続することも不可能になってしまった」（前掲訳書、23—24ページ）。

ところで、こんどは、「パリ・ノート」とともに旧メガI/3で1932年に公刊された『経済学・哲学草稿』の邦訳についてであるが、副島種典氏の伝えるところによれば、それは、すでに戦前に「わが国では、おなじく1932年に、改造社版のマルクス＝エンゲルス全集、第26巻と第27巻に、序文をのぞいて、三つの手稿が別々に訳出された」（副島、前掲訳書、141ページの注記、参照）ということである。

戦後になると、「序文」をも含めて「第1草稿」～「第3草稿」が全体として『経済学と哲学とにかんする手稿（1844年）』という題名のもとに、「国民経済学批判のために 付 ヘーゲル哲学にかんする終章（マルクス）」というサブ・タイトルをつけて、1951年、『マルクス＝エンゲルス選集』補巻4、大月書

店に収録された。

単行本（文庫本）としてもっとも早く出版されたのは、三浦和男訳・解説の『経済学＝哲学手稿』青木文庫、1962年11月であったが、その底本について三浦氏は「凡例」で次のように述べている。「テキストとしては、ドイツ民主共和国・ディーツ書店出版の *Bücherei des Marxismus-Lenismus* の42巻と41巻とに、それぞれ、経済学の部分と哲学の部分とにわけてのせられているものを底本にした。すなわち、Marx/Engels, *Kleine Ökonomische Schriften*, Dietz Verlag, Berlin, 1955 と Marx/Engels, *Die heilige Familie und andere philosophische Frühschriften*, Dietz Verlag, Berlin, 1957 とにおさめられているものが、それである」（三浦和男訳・解説『経済学＝哲学手稿』7ページ）。なお三浦氏は翻訳にさいしては、ソ連邦マルクス＝レーニン主義研究所編集の *K. Маркс и ф. Энгельс, Из ранних произведений* のうちに収められているロシア語訳と、モスクワの外国語出版局から刊行されている Martin Milligan 訳の *Karl Marx, Economic and philosophic Manuscripts of 1844* とを参考にしたとのことである。

つづいて1963年3月には藤野渉訳『経済学・哲学手稿』国民文庫、大月書店が出版された。その底本となったのは、三浦氏の場合と同じディーツ社版のテキストであったが、藤野氏は、前記の英訳モスクワ版や仏訳 *Manuscripts de 1844 (Économie politique et philosophie) par Emile Bottigelli* (1962, Éditions Sociales, Paris) その他の諸版（とくにドイツ語版 *Karl Marx ; Die Frühschriften*, hrsg. v. Siegfried Landshut ほか）を参照したということである。この藤野訳では、巻頭に「編集者の序文」として「MEGA 第3巻（1932年）の序文から（抄訳）」や「英語モスクワ版の序文」が付されており、また巻末には「英語モスクワ版の用語についてのノートから」や「仏訳者の序文から」などが〔付録〕として収められている。

さらに翌1964年3月には、城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫が刊行された。これの底本とされたのは旧メガ第Ⅰ部第3巻所収のテキストであるが、邦訳にさいしては前記のディーツ社版や英語モスクワ版その他の諸

版を参考にしたとのことである。そしてこの城塚・田中両氏の訳は、これまでのすべての邦訳では、旧メガI/3において「付録」に入れられていた「第4草稿」が省略されていた——ただし藤野訳は、この「第4草稿」を省く理由について、それは「ヘーゲルの『精神現象学』終章の絶対知のところからの八つの抜き書きだけであって、一般の学習者には訳出不要と考えられるので本訳書では省いた」（藤野訳『経済学・哲学手稿』12ページ）といている——のにたいして、それが「付録」ではなく、〔ヘーゲル『精神現象学』最終章についてのノート〕という見出しのもとに、いわば『経哲草稿』本体の「第4草稿」として翻訳・収録されている点が特徴的である。

最後に、1975年3月刊行の『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻、大月書店所収のものがある。これは、Karl Marx-Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband, erster Teil, Institut für Marxismus-Lenismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1968を底本として、『1844年の経済学・哲学手稿』という表題のもとに真下信一氏によって訳出されたものである。なお、この邦訳でも「第4草稿」は省略されている。

## 〔5〕 「ミル評注」先行論者たちの見解

さて、すでに〔1〕「はじめに」で述べておいたように、本稿は、「ラーピン論文」の公表がわが国における「パリ・ノート」と『経哲草稿』の研究分野にひきおこした大きな波紋を示すための、いわば予備作業として、同論文公表以前のこの分野での研究状況を——とくに執筆順序の問題に重点を置きながら——やや詳しく見ておくことを課題とするものであるが、前節ではこの執筆順序の問題から離れて「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』との邦訳書について概観してきた。だが、いまやわれわれは本稿の中心テーマである執筆順序の問題に立ち帰ることにしよう。その場合、ここでの検討の照準を、「パリ・ノート」中、わけても「ミル評注」（とくに「ノートⅣ」）と『経哲草稿』（とく

に「第1草稿」とのうち、どちらが先に執筆されたか、という点に合わせたいと思う。

私見によれば、この点をめぐる論者たちの見解は、「ラーペン論文」公表以前には二つの異なった見解、すなわち「ミル評注」が『経哲草稿』（「第1草稿」）よりも先に書かれたとするものと、逆に『草稿』のほうが「評注」よりも先に執筆されたとするものとに分かれていたといつてよい。そしていま、かりに前者を「ミル評注」先行説、後者を『経哲草稿』先行説と名づけることにすれば、「評注」先行説を採っていたのは細見英、平井俊彦、宮崎喜代司らの諸氏であり、これにたいし、『草稿』先行説の見地に立っていたのは大島清、中川弘らの諸氏であったということができよう。そこでわれわれは、執筆順序の問題にかかわった論者たちの所論を見てゆくにあたって、「ミル評注」先行論者たちの見解として細見、平井および宮崎の三氏の場合を、また『経哲草稿』先行論者たちの見解としては大島・中川の両氏の場合をとりあげることしよう。われわれはまず、「ミル評注」先行説を唱えた論者として細見氏の見解を考察対象としよう。

#### （A）細見英氏の場合

細見氏の見解は、すでに1961年10月、『立命館経済学』第10巻第4号所収の「J. ミル『政治経済学綱要』への批判的評注——マルクスの最初の経済学研究より——」において表明されていた。すなわち細見氏は、この翻訳・紹介論文の冒頭部分で、さきにわれわれが列挙した旧メガ I/3 掲載の「パリ・ノート」（「ノート I」～「ノート IX」）の内容目録（本誌本号、5—7ページ参照）を示したあとで次のように書いておられる。

「右のうち、すくなくとも最初の五冊は、『経哲草稿』執筆以前に作成されたもののようである。MEGAの編集者はこれらを、『経哲手稿』に『直接関連して興味深く、その直前の段階のものとして、マルクスの仕事ぶりの特徴づける事例を提供するもの』と評価して、のちのボアギュベールからの抜粋とともに、その内容全体をMEGAの前掲の巻 [I/3] に収録している」（前掲誌、119—120ページ参照。力点——引用者）。

この一文から細見氏が、「パリ・ノート」のうち、「ミル評注」を含む「最初の五冊」は『経哲草稿』以前に執筆・作成されたと考えておられたことは明白であろう。しかしわれわれは、同氏がなぜ、このように推定されたのかを探るために、いま少し立ち入って氏の所論を見てゆくことにしよう。

細見氏は、経済学史学会編『「資本論」の成立』（岩波書店、1967年）所収の論文「マルクスとヘーゲル——経済学批判と弁証法——」において次のように論述しておられる。

「1844年の初頭に着手されたマルクスの経済学研究のうち、ジェームズ・ミルの『政治経済学綱要』からの抜粋につけられた評注——『ミル評注』のなかに、われわれは、マルクスによる経済学的諸範疇批判の最初の試論的展開をみる。ここでマルクスは、表象としては三階級分化の階級社会を前提しながら、論理としては自己労働にもとづく私的所有から出発している。／……だがマルクスは、すでに市民社会を〈階級社会〉として表象していた。とすれば経済学的諸範疇の批判的展開は、当然ながら階級関係の必然性の解明にまで進まねばなるまい。事実マルクスは、『ミル評注』で、『貨幣』本質の考察にすぐつついて、階級分裂・階級関係への論理的展開の志向をしめしている。しかし、自己労働にもとづく所有を出発点とし、交換・分業を媒介とする生産物の価値・貨幣への発展、労働の営利労働への転化の論理から、要するに商品交換＝商品生産の論理から、その論理的演繹において階級分裂・階級関係を展開することは、なんとしても不可能である。そこで、ふたたび出発点にたちかえって市民社会批判＝経済学批判の論理を練りなおす。——『経済学・哲学手稿』（前掲書、131—132ページ。のち前記・細見著『経済学批判と弁証法』未来社、1979年所収、21—22ページ。力点——細見、ゴシック——引用者）。

上掲引用文のうち\*印を付けた個所には、細見氏自身が「ミル評注」からの次の一文を注記しておられる。「労働の自己自身からの分裂＝労働者の資本家からの分裂＝労働と資本の分裂。そして資本の本源的形態は土地所有と動産とに分かれる。……労働、資本、土地所有相互の分裂、ならびに労働と労働との、資本と資本との、土地所有と土地所有との分裂、……これらの分裂は、自己疎

外を自己疎外の姿態でとともに、相互疎外の姿態でも現象せしめる」（岩波・前掲書，141ページ。未来社・前掲書，30—31ページ）。

それはともかくとして、さきの引用文から知られるように、細見氏によれば、「ミル評注」において「経済学的諸範疇批判の最初の試論的展開」をおこなったマルクスは、「当然ながら階級関係の必然性の解明にまで」すすまなければならなかったが、この点で彼は挫折した。すなわち、「商品交換＝商品生産の論理から、その論理的演繹において階級分裂・階級関係を展開すること」は「なんととしても不可能」であった。そこでマルクスは、「ふたたび出発点にたちかえて市民社会批判＝経済学批判の論理を練りなおす」。こうして出来あがったのが『経哲草稿』にはかならない。だから執筆順序は当然、「ミル評注」→『経哲草稿』ということになる。

細見氏のこのような見解は、氏の次の二つの文章からも明らかであろう。

〔引用A〕——「『経哲手稿』（1844年4月～8月頃執筆）が、一枚の紙を縦に三つの部分に区切り、それぞれ『労賃』『資本の利潤』『地代』の表題をかかげて並列して書きはじめられていることに端的に示されているように、ここでマルクスは、三階級分化・階級対立を分析の出発点に据え、そしてそこから一挙に、直接的生産過程——『疎外された労働』に下向する」（岩波・前掲書，132—133ページ。未来社・前掲書，22ページ。力点——細見）。

〔引用B〕——「『ミル評注』から『経哲手稿』へは、分析視角と論理展開の方法がまったく転換した。とすれば、新たな視点で本質的矛盾として把握された『労働の疎外』を基礎として、交換価値、貨幣をどう展開するか——このことが、当然問題となろう」（岩波・前掲書，135ページ。未来社・前掲書，24ページ。力点——引用者）。

上掲〔引用A〕の末尾で、細見氏が「直接的生産過程」への「下向」について語っておられる点には、私はいささか疑念を抱かざるをえないのだが、いまは、そのことは措いて問わないとして、細見氏の考えでは、「ミル評注」と『経哲草稿』とのあいだには「分析視角と論理展開の方法」の点で「まったく」の「転換」が見られるわけである。いいかえれば、「ミル評注」でマルクスは、

商品交換関係の分析から出発しながら、そこから「論理的演繹」において階級分裂・階級関係を展開することに失敗した。そこで彼は、あらためて三階級の対抗関係そのものを分析の起点に据えて、その階級関係の根拠としての「疎外された労働」をめぐりだした。こうして交換関係視角から生産関係視角への「まったく」の「転換」。だから分析視角の深化という点からも、執筆順序は「ミル評注」から『経哲草稿』へのはずだ、と細見氏は推定したのであった。さきに私が、氏の見解を「ミル評注」先行説と特徴づけたゆえんである。

### （B）平井俊彦氏の場合

こんどは平井氏の見解をとりあげることしよう。考察対象とするのは、杉原・重田両氏の前掲訳書『経済学ノート』にかんする平井氏の「書評」である。ただし「書評」といっても、のちに共訳者の一人である重田氏も「増補再版」への「訳者解説」でいっているように、これは「それ自身『ミル評注』を中心にした『経済学ノート』論となっていて、いくつかの注目すべき論点を含んでいる」（前掲訳書、232ページ）のだが、それはともかく、「書評」論文という性格もあってか、平井氏は前半部分では、『経済学ノート』と『経哲草稿』とをそれぞれ全体として問題にする傾向が強く、たとえば「1 本書のあらまし」では次のように書いておられる。

「いうまでもなく、本書は『経済学批判』や『資本論』とちがって、どこまでも『経済学ノート』であって、マルクスが自分の思想を整理しこれを体系的に展開したものではない。いわば、マルクスがそれぞれの書物について断片的に感想を付記し、重要と思われる部分を抜粋したものである。すでにこの種のものとして、マルクスには『経済学批判要綱』が邦訳されているし、ある意味で『経済学・哲学手稿』もこの種のものである。もっとも、同じノートといっても、『経済学ノート』と『経済学・哲学手稿』とでは、書きぶりにかなりちがいがあって、後者がすでに完成原稿の一步前の手稿であるのに対して、前者はいわば第1次ノートとでもいえるであろう」（K・マルクス著、杉原四郎・重田晃一共訳『経済学ノート』、関西大学『経済論集』第12巻第5・6合併号、1963年2月所収、188ページ。力点——引用者）。

この一文からして平井氏が、『経済学ノート』が全体として「第1次ノート」であるのにたいし、『経済学・哲学草稿』のほうはやはり全体として「完成原稿の一步前の手稿」だと考えておられること、だから執筆順序の点でいえば、当然、『経済学ノート』全体→『経哲草稿』全体、というふうに解していることが読みとれるであろう。したがって、氏にあっては、「ミル評注」と『経哲草稿』（とくに「第1草稿」）との先後関係については、明らかに前者の執筆が後者のそれよりも先行していたということになる。

しかし、平井氏の場合、「書評」後半部分になると、『経済学ノート』のうち「リカードウ、ジェームズ・ミルそれにマカロックの評注」、わけても「ミル評注」に重点が移されたうえで『経哲草稿』との対比が問題とされることになる。

まずわれわれは、「ミル評注」を含む『経済学ノート』＝「パリ・ノート」について氏が語っているところを聞くことにしよう。「……実はこの生産物相互の関係は、交換関係としてみられているのであり、これが『経済学ノート』をつらぬく理論的地平であった。そして商品流通の過程いわば商品交換関係の総体として市民社会がえがかれているのである。すなわち、この経済的諸カテゴリーの展開する場所は、交換過程であり、けっして生産過程ではなかった。このことが『経済学ノート』の段階でのマルクス思想の段階をしるしているものである。もとより、生産活動が捨象されているわけではなく、各所に生産がふれられてはいるものの、それは表象として出てくるのであって、けっして理論を展開する発条としてではないのである」（前掲誌、197ページ。力点——平井）。

このように平井氏は、『経済学ノート』をつらぬく「理論的地平」は「交換関係」であり、また「経済的諸カテゴリー」の展開場所も「交換過程であり、けっして生産過程ではなかった」とされるわけである。そして氏は、「このことが『経済学ノート』の段階でのマルクス思想の段階をしるしている」と力説されるのである。もちろん、この「段階」でもすでに随所で「生産活動」あるいは「生産」＝「生産過程」に言及されてはいるが、しかし、それほどまでも「表象」としてであって、けっして「理論を展開する発条」としてではなかった、というのが氏の見解である。

『経済学ノート』とくに「ミル評注」をこのように解される平井氏は、さらにその歩をすすめて、「マルクスは『経済学ノート』で、市民社会の経済過程を展開し、商品生産物および貨幣の交換過程のなかから、その究極のゲネシスの根拠たる生産および分業にまで到達し、そこにおいて労働の抽象化過程、『労働の自己自身からの分裂』、そして労働と資本との分裂をみたのである」として、ひきつづき次のように述べられる。

「ということは『疎外の弁証法』からみると、賃労働と資本との対立が構想されていたということになろう。そして、この私有財産社会たる資本制社会において、賃労働と資本との対立から、『疎外された労働』の категория が展開されるのは、『経済学・哲学手稿』においてであり、ここにおいてそれが完成された形態でとらえられるといえよう。このばあい、すでにのべてきたように『手稿』では、資本主義社会における賃労働そのものが理論の主軸となり、その展開が生産過程つまり人間と自然との物質代謝の過程においてつかまれ、類的活動としての労働からの人間疎外過程が理論的につかまれた。とすれば、社会分析の理論的地平ははっきり生産過程となっており、ここにはじめて生産過程が理論の分子から分母へと転換をおこなうことになるのである。ということは、経済学のうえて、商品から貨幣への categoria 展開から、貨幣より資本への展開には、交換過程から生産過程への転換があるのであって、ここに非連続がみられよう。だが、それらは機械的に分離しているのではなく、すでに『経済学ノート』では、それが表象としてではあるが先取されていたといえないであろうか」（前掲誌、200—201ページ。力点——引用者）。

いささか長い引用となったが、ここには、「パリ・ノート」（とくに「ミル評注」と『経済学・哲学草稿』との関連についての平井氏の基本的見解が、いわば集約的に示されているといえよう。すなわち、さきに見たように、平井氏は、とくに「ミル評注」を念頭に置きながら、『経済学ノート』をつらぬく「理論的地平」は「交換関係」ないし「商品流通の過程」であって、たとえそこで「生産」や「生産過程」に言及されていても、それは「理論を展開する発条」としてではなく、どこまでも「表象」として出ているにすぎないとされて

いた。ところが、いまや『経哲草稿』においては「賃労働そのもの」が「理論の主軸」となり、「賃労働と資本との対立」から、「疎外された労働」のカテゴリーが「完成された形態で」展開されることになる。こうして「社会分析の理論的地平ははっきり生産過程となっており、ここにはじめて生産過程が理論の分子から分母へと転換をおこなうことになる」と氏は強調される。したがって、氏の考えでは、「経済学のうえで、商品から貨幣へのカテゴリー展開から、貨幣より資本への展開には、交換過程から生産過程への転換があるのであって、ここに非連続がみられよう」ということになる。しかし、氏によると、「それら〔交換過程と生産過程?〕は機械的に分離しているのではなく、すでに『経済学ノート』では、それ〔生産過程?〕が表象としてではあるが先取されていた」ため、かの「転換」が可能となり、また「非連続」が克服されることにもなる、というのが氏の見解のようである。

それはそれとして、以上の平井氏の所論のうち、たとえば「……賃労働と資本との対立から、『疎外された労働』のカテゴリーが展開されるのは、『経済学・哲学手稿』においてであり、ここにおいてそれが完成された形態でとらえられるといえよう」とか、「……〔『経哲草稿』では〕社会分析の理論的地平ははっきり生産過程となっており、ここにはじめて生産過程が理論の分子から分母へと転換をおこなうことになる」とかの章句から判断すれば、平井氏もまた執筆順序の点では、『経済学ノート』（とくに「ミル評注」）から『経哲草稿』へ、の順序を考えておられることは明らかであろう。私が平井氏を、「ミル評注」先行論者の一人としてとりあげたのは、このためである。

### （C）宮崎喜代司氏の場合

われわれがこれまで見てきた細見英・平井俊彦両氏の場合とは、やや問題意識と分析視角を異にするが、しかし執筆順序にかんしては上記両氏と同じく「ミル評注」先行説を採るもう一人の論者、すなわち宮崎喜代司氏の場合を次にとりあげることにしよう。そのさい、われわれがとりあげるのは、同氏の論文「論理的歴史的方法の形成〔I〕——初期マルクスにおける経済学の方法——」（広島大学『政経論叢』第17巻第3号、1967年11月所収）である。

宮崎氏が「ミル評注」先行説の見地に立っておられる点は、この論文の「目次」の一部を見れば、およその察しがつくところであろう。

## 目次

### 第1節 経済学批判の基礎視角設定

——経済的「疎外」把握の思弁的方法——

1. 商品交換における「疎外」, (『経済学ノート』)
2. 賃労働における「疎外」, (『経済学・哲学草稿』)

以下, 略

この「目次」冒頭部分を見れば、宮崎氏が執筆順序の点で、『経済学ノート』（「ミル評注」）から『経哲草稿』への順序を考えておられるであろうことは、ほぼ明らかだといってよかろう。だが、われわれは氏の所論をいま少し詳しく見しておくことにしよう。

宮崎氏はまず、「ミル評注」における貨幣論を次のように論評される。——「マルクスは貨幣の本質を追求して交換からさらにその基盤にある分業労働にまで分析を進め、そこから今度は逆に貨幣における疎外を論理的に説明したのである。したがって彼は商品と貨幣の次元における疎外（＝物神化）に関する限り、ある程度その理論的把握に成功したといつてよいであろう。ところがすでに述べたように、マルクスが実際にみていたのは単なる商品生産ではなくて、まさに資本制的生産であった。その点この段階のマルクスにおいては対象認識とその理論的把握との間にズレがあるといわなければならないが、これはもちろん彼が賃労働＝労働力商品、の概念的把握に達していなかったこと、つまり商品生産と資本制生産とを論理的に区別しえていなかったことによるものであろう」（前掲誌、40—41ページ）。

このように宮崎氏は、「彼〔マルクス〕は商品と貨幣の次元における疎外（＝物神化）に関する限り、ある程度その理論的把握に成功した」と評価されるのだが、しかし他方、「この段階のマルクスにおいては対象認識とその理論把握との間にズレがある」とされる。「ミル評注」には、たしかにこうした「ズレ」が見られるとはいえるであろうが、その根拠を、当時のマルクスが「労働力商

品」の概念に到達していなかったこと、だからまた、彼が「歴史上の単純商品生産」と資本主義的商品生産とを明確に区別しえず両者を混同していたこと<sup>(注)</sup>を求めるのはどうであろうか。

（注） この場合、宮崎氏は遊部久蔵氏の一連の論稿（たとえば「疎外論の経済学的意義」『三田学会雑誌』第52巻第1号所収、「資本論の成立——1840年代」遊部久蔵・大島清他編『資本論講座』第1分冊、青木書店、1963年所収ほか）——これらの論稿で遊部氏は、初期マルクスにおける疎外と物神性との「混同」、単純商品生産と資本主義的生産との「混同」などをしきりに強調しておられる——から示唆を得ているように思われるが、しかし私はこのような遊部氏の所説については、『経済学史学会年報』第2号（1964年12月）掲載の「学界展望」における山中隆次氏の次の所論を玩味すべきであると思う。

「とくにここ〔上記『資本論講座』第1分冊所収の遊部論文〕で遊部氏が、40年代 Marx の消極面として強調している点は、疎外と物神性の〈混同〉である。この初期 Marx にみられる疎外と物神性の〈混同〉は、遊部氏によれば、あるときは前者を後者でとらえる〈混同〉であり、あるときは後者を前者でとらえる〈混同〉となってあらわれる。はじめの例は疎外を交換とむすびつけている『経済学ノート』や私的所有にもとづく社会的分業とむすびつけている『ドイツ・イデオロギー』であり、あとの例は『経済学・哲学手稿』や『哲学の貧困』であると同氏はみる。たしかに、初期マルクスの『疎外』論には、……私的所有にもとづく社会的分業のもとの『疎外』（正しくは『物神性』）と、直接生産者の生産手段からの分離にもとづく『疎外』とが、そのときどきの問題視角や対象の変化に応じて、あるときは前者に、あるときは後者に力点をおいて展開されていることは事実である。そして、このことにたいし、のちの『資本論』からみて〈混同〉していると指摘することそれ自体は、けっしてまちがってはいないだろう。しかし、ひるがって初期マルクス自身に内在するならば、これらすべてを〈混同〉の一語で片づけることは、あまりにものちの『資本論』とくに価値論の確立という視点からみすぎていないだろうか」（前掲『年報』15—16ページ）。

ところで宮崎氏は、『経済学・哲学草稿』「第1草稿」から私有財産の本質にかんするマルクスの次の文章を引用される。——「こうして労働者は、疎外された、外化された労働を通じて、労働にとって疎遠な、そして労働の外部に立つ人間の、この労働にたいする関係を生みだす。労働にたいする労働者の関係

は、労働にたいする資本家の、あるいはその他ひとが労働の主人をなんと名づけようと〔とにかくその主人の〕関係を生みだすのである。したがって私有財産は、外化された労働の、すなわち自然や自分自身にたいする労働者の外的関係の、産物であり、成果であり、必然的帰結なのである。／それゆえ私有財産は、外化された労働、すなわち外化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間という概念から、分析を通じて明らかにされるのである」(MEGA<sup>①</sup>, I/3, S. 91. 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫, 101—102ページ。力点——マルクス)。

マルクスのこの所説について宮崎氏は「ここでは私有財産が商品・貨幣論次元の問題とされず、直接に賃労働の産物であるとされている」と述べたあと、さらにつづけて次のように論述される。「この点『草稿』（『経済学・哲学草稿』）は『経済学ノート』の場合よりも一段と具体的な次元で私有財産を把握しているといえるわけである。私有財産は自己労働に基く正当なものである、という牧歌的神話に内蔵されているブルジョア的な本質を暴露して根本的に批判するためには、私有財産が『疎外された労働』＝賃労働、の産物であるということ、つまりそれは資本によって賃労働から搾取された剰余（＝利潤）の蓄積されたものに他ならない、ということを明確にするのが最も有効かつ本質的な方法である。国民経済学の基礎をなしている私有財産が、決して自己労働に基くものではなくて、賃労働（他人労働）の搾取に基くものである、ということをはっきりさせたこの『経済学・哲学草稿』こそは、その意味ではまさに国民経済学批判の基礎視角を初めて設定したものであるといえよう。この点は極めて重要である。もちろん『経済学ノート』においても、マルクスはたしかに私有財産批判の立場に立っていた。しかしその批判は事実に賃労働者に着目しながらも、理論的には貨幣にまで発展すべき『商品交換における疎外の論理』、つまり物神化論の視角に立ったものでしかなかったのであって、本来の『疎外された労働』＝賃労働における疎外を理論的に認識したのは、この『経済学・哲学草稿』が最初だったのである」（前掲誌, 48—49ページ。力点——宮崎, ゴシック——引用者）。

ここでの宮崎氏の見解は、およそ次のように再整理することができよう。——なるほど『経済学ノート』（とくに「ミル評注」）においても、マルクスはすでに「私有財産批判の立場」に立ってはいいたが、しかし、そこでのマルクスの批判は「商品・貨幣論次元」のものであって、その批判は「事実的には賃労働に着目しながらも、理論的には貨幣にまで発展すべき『商品交換における疎外の論理』」に拠るものにとどまっていた、しかるに、私有財産が「直接に賃労働の産物であるとされている」『経哲草稿』は『経済学ノート』（「ミル評注」）よりも「一段と具体的な次元で私有財産を把握している」といってよく、マルクスが「本来の『疎外された労働』＝賃労働における疎外を理論的に認識し」、こうして「国民経済学批判の基礎視角」を「初めて設定した」のは『経哲草稿』においてであった、と。

この場合、宮崎氏にあっては、理論認識のいわば成熟度の点で『経哲草稿』のほうが『経済学ノート』（「ミル評注」）よりもいっそう高くなっていると考えられていることは、明らかなるところであろう。そして、これを執筆順序の問題としていえば、宮崎氏の場合、「ミル評注」→『経済草稿』という時間的順序が想定されていたと見て差しつかえなからう。私が細見・平井両氏とともに、宮崎氏をも「ミル評注」先行論者の一人と見なすゆえんである。

## 〔6〕 『経哲草稿』先行論者たちの見解

さて、こんどは『経哲草稿』先行論者たちの見解をやや詳細に検討してゆくことにしよう。

### （A） 大島清氏の場合

ここでわれわれが考察対象とするのは、大島氏の著書『資本論への道』東京大学出版会、1968年である。

大島氏のこの書物では、その第2章に「『経済学・哲学手稿』『経済学ノート』」という表題がつけられており、そのこと自体が、氏の『経哲草稿』先行

説を示唆して興味深いともいえるが、われわれがここであらかじめ注意しなければならないのは、同氏の場合、「パリ・ノート」と『経哲草稿』とをそれぞれ全体としてとりあげ、それらの執筆順序を問題にするのではなくて、「パリ・ノート」中のとくに「ミル評注」と、『経哲草稿』中のとくに「第1草稿」との先後関係を問題にしている場合が多いという点である。<sup>(注)</sup>

(注) この点にかかわるものとして、われわれは大島氏の次の一文を下に引用しておこう。——「この『経済学・哲学手稿』および『経済学ノート』が書かれた時期については、現在正確には知られていないが、前者についてはおおむね1844年4月から8月にかけて執筆されたものと推定されている。『経済学ノート』は、9冊のノートからなっており、ノートⅠからⅤまでは大体44年1月から6月のあいだに作られ、ジェームズ・ミル『綱要』(*Elements of Political Economy*, 1821年)からの抜粋は44年の夏に作成されたことが、『経済学批判綱要』巻末の文献索引の説明記述から傍証される (Marx, K., *Grundrisse zur Kritik der politischen Ökonomie*, 1844. 高木幸二郎監訳, 大月書店版, [Ⅴ] 1065—8頁)」(前掲書, 40ページ)。

つまり大島氏は、「大体 [18] 44年1月から6月のあいだ」につくられたとされている「ノートⅠ」～「ノートⅤ」のうち、とくに「ミル評注」をとりだして、その作成時期は「44年の夏」だと解されるわけである。

ところで大島氏は、「『経済学・哲学手稿』と『経済学ノート』とのあいだには、マルクスの経済学についての見解に相違がある」として、つぎのように主張しておられる。

「……『経済学・哲学手稿』では〔『疎外』の論理は〕労働過程における主体の喪失、生産物の疎外として、したがって少なくともここでは、とり戻さるべき収奪を現実的な労働過程について、すなわち『労働の疎外』において社会主義の思想を展開するのである。だが、『疎外された労働』の概念は、資本と労働者の関係を直接収奪者と被収奪者に還元することになるため、商品交換関係についての考察は排除され、リカードウの労働価値説は否定されることになる。すなわち古典学派は等価交換を前提することによって資本と労働者とのあいだの収奪関係を隠蔽するものとされる。／『手稿』におけるこのような基本的見解は、『経済学ノート』でもリカードウについての評注などでは同様であるが、

『ジェームズ・ミルにかんする評注』では、まったく違った見解を展開している。すなわち貨幣にかんして考察しはじめると、マルクスは外在化（疎外）の論理を商品交換における人間相互の関係においてとらえようとするのである。『疎外された労働』では人間と人間との関係は収奪者と被収奪者の関係とならざるをえないのであるが、ここでは外在化は譲渡として、人間相互の関係が考察されるのである」（前掲書、40—41ページ）。

このように大島氏は、『経哲草稿』での疎外論と「ミル評注」でのそれとの「相違」を問題にしながら、前者では「人間と人間との関係は収奪者と被収奪者との関係とならざるをえない」し、『疎外された労働』の概念は、資本と労働者の関係を直接収奪者と被収奪者に還元する<sup>(注)</sup>ので、リカードウの労働価値説は否定されることになり、また、総じて古典学派は「等価交換を前提することによって資本と労働者とのあいだの収奪関係を隠蔽するものとされる」ことになる。これにたいし、後者すなわち「ミル評注」においては、マルクスは「商品交換関係についての考察」を「排除」することなく、「外在化（疎外）の論理を商品交換における人間相互の関係においてとらえよう」と試み、「ここでは外在化は譲渡として、人間相互の関係が考察される」と氏は考えるわけである。こうして大島氏にあっては、マルクスは『ジェームズ・ミルにかんする評注』では、『経哲草稿』および、『ミル評注』以外の「バリ・ノート」とはまったく違った見解を展開している」とされるのである。

（注）この点は、大島氏がくりかえし力説するところであって、たとえば氏はこうも論じておられる。「……マルクスの『手稿』における『疎外された労働』はこれまで考察してきたところで明らかなごとく、賃金労働を結局、奴隷労働と同じ収奪関係に還元させるものであった。〔草稿〕でのマルクスは『疎外された労働』の概念と私有財産との二つの要因のたすけをかりれば、『いっさいの国民経済学的範疇を展開することができる』といったのであるが、結局はあらゆる経済学上の概念を『疎外された労働』の帰結としての私有財産に解消し、労働者に敵対関係においてにすぎない。スミスが人間の労働過程そのものをも商品交換関係に還元したのにたいして、マルクスは商品交換関係を無視して労働過程を強制的な収奪関係に解消したのである」（前掲書、67ページ）。

なお、上掲引用文のうちスミスにかんする文言、すなわち「スミスが人間の労働過程そのものを商品交換関係に還元した」という文章の理解のために、われわれは大島氏の次の一文をここに引用しておこう。——「アダム・スミスは交換価値の規定にさいして、独立した諸個人のいとなむ社会的分業から出発して、個人的な労働とその成果の交換をひきだしている。スミスのばあい、これら個々の商品生産者の生産的活動（自然への働きかけ）そのものをも自然とのあいだの商品交換関係としてとらえている。このことは『土地の私有と資本の蓄積に先だつ社会』を前提し、そこにおいては『労働は本源的な貨幣である』とするスミスの想定のうちにしめされている」（前掲書、59ページ）。

ところで、本節における上来の検討によってわれわれは、『経哲草稿』での疎外論と「ミル評注」でのそれとの「まったく違った」点についての大島氏の見解をほぼ理解できたものと考え、いまやわれわれは、『草稿』と「評注」との執筆順序について氏がどのように解しておられたかを知るために、氏の次の一文を引用しておこう。

「……『ミルにかんする評注』をとくに取り上げるべきものとかがえるのは、さきにも指摘したとおり、貨幣にかんする理論的追求についての評価そのものよりも、貨幣・価値・商品交換を理論的に考究することによって、人間の自己疎外概念が『草稿』の『疎外された労働』よりも具体的かつ理論的になってきたことであろう。くりかえして言うように、『疎外された労働』のばあいは、労働過程について、労働者から労働および労働の成果が労働しない人間に疎外（収奪）される関係を、疎外（収奪）されない労働に対立させることで成り立った概念であったが、それは直接的な収奪関係を示すにすぎなかったのである。これにたいして『ミルにかんする評注』では、人間の本質・自己産出過程を共同体において生産活動相互の、および生産物についての交換においてとらえ、私的所有を前提する商品所有者相互の関係としての商品経済が、この共同的存在の疎外態となるわけである。いずれにおいても、人間の本質が疎外され、したがって人間は自己喪失となっている。したがって、疎外態を止揚しなければならないという社会主義的見地が展開されている点では同様であるが、社会的関係としての把握においてははるかに進んでおり、それゆえにこそ、貨

幣についての理論的追求も可能となったとみるべきであろう」（前掲書、77—78ページ。力点——引用者）。

この一文をもっぱら執筆順序の問題にひきつけて読むならば、ここでの大島氏の見解は、およそ次のようだといってよかろう。——『経哲草稿』での「疎外された労働」は結局のところ、たんに「直接的な収奪関係を示すにすぎなかった」が、「ミル評注」になると、「人間の本質・自己産出過程を共同体において生産活動相互の、および生産物についての交換においてとらえ、私的所有を前提する商品所有者相互の関係としての商品経済が、この共同的存在の疎外態となる」のであって、こうして「ミル評注」では、「貨幣・価値・商品交換を理論的に考究することによって、人間の自己疎外の概念が『手稿』の『疎外された労働』よりも具体的かつ理論的になってきた」といってよい、またかぎりで、「ミル評注」は『経哲草稿』よりも「社会的関係としての把握においてははるかに進んで」いる、と。そして氏の考えでは、このことは、とりもなおさず、理論把握の成熟度については「ミル評注」のほうが『経哲草稿』よりも「はるかに」高いことを意味するのである。この点、前節(C)で見た宮崎喜代司氏の場合とはまったく逆だといってよい。それはともあれ、こうして大島氏の場合、執筆順序は当然『経哲草稿』から「ミル評注」への順でなくてはならない（ただし「ノートⅠ」～「ノートⅢ」については、それらが『草稿』に先だって執筆・作成されたであろうことは、この場合、前提されている）ということになる。だからまた、われわれは、大島清氏を『経哲草稿』先行論者の一人と見なして一向に差しつかえないわけである。

### （B） 中川弘氏の場合

最後に、『経哲草稿』先行説の立場に立つもう一人の論者である中川弘氏の所論を見ておくことにしよう。その場合、われわれの考察対象となるのは同氏の論文「『経済学・哲学草稿』と『ミル評注』——『疎外された労働』を中心とした一考察——」（福島大学『商学論集』第37巻第2号、1968年10月所収）である。

この論文において中川氏は、例の『独仏年誌』第1・2合併号（1844年2月）で公表されたマルクスの二つの論文、すなわち「ユダヤ人問題によせて」と

「ヘーゲル法哲学批判・序説」にかんして、つぎのように論じておられる。

「もちろん、内容規定における抽象性と、未解明の諸論点を残しているという不備にもかかわらず、我々は、『独仏年誌』の二論稿において、近代市民社会分析の基準（商品＝貨幣関係基準、資本関係基準）、並びに、批判の原理＝基準（人間・社会本質観）とがひとまず定礎され、端緒的に形成＝確立されているということではできよう。そして、これらの諸点を一層深く、内容豊かに解明するものこそ以下考察せんとする『経済学ノート』（とりわけ『ミル評注』）、『経済学・哲学草稿』にはかならないのである。その場合、留意さるべきことは、この二つの分析基準は、近代市民社会分析の不可欠の二基準として有意味的関連をもつものであるにもかかわらず、商品＝貨幣関係基準は主として『ミル評注』に、資本関係基準は主として『草稿』にと、さしあたり切り離されたまま継承されてゆき、その結果、『草稿』、『ミル評注』の市民社会分析を少しく一面的な内容のものとし、人間の本質の疎外分析に少なからぬ差異を生ぜしめ、その内容を特徴づけるものとなるということ、これである」（前掲誌、16ページ。カ点——中川）。

見られるように、中川氏は、「ユダヤ人問題によせて」での「近代市民社会分析の基準」は「商品＝貨幣関係基準」であり、他方、「ヘーゲル法哲学批判・序説」でのそれは「資本関係基準」であるとされ、それらの基準は「批判の原理＝基準（人間・社会本質観）」とともにこの「二論稿」で「ひとまず定礎されるのだと考える。そのうえで氏は、これらの「分析基準」は相互に密接な「有意味的関連」をもつにもかかわらず、さしあたりは「切り離されたまま」、  
「商品＝貨幣関係基準」は主として「ミル評注」へ、また「資本関係基準」のほうは主として『経哲草稿』へと「継承」されることになると主張されるわけである。

（注）中川氏は、「ミル評注」と『経哲草稿』へ「さしあたり切り離されたまま」の形で「継承」されるこれら二つの「基準」のうち、1840年代には「資本関係基準」のほうに前面に押し出されるが、やがて1850年代になると、「商品＝貨幣関係基準」が『経済学批判要綱』や『経済学批判』において「復位」されることになる

として、つぎのように論述されている。——「たしかに、『草稿』、『ノート』以降、40年代マルクスの主要な関心は、資本—賃労働の対抗とその基礎過程分析、とりわけ、《富の蓄積に伴う貧困の蓄積》、その必然の論理を解明することにおかれ、単純な規定における商品論、貨幣論それ自体の究明は主脈をなしていないかのである。だが、50年代に入るや旺盛に展開されたリカード理論の批判的検討の成果、『経済学批判要綱』、『経済学批判』においては、商品論、貨幣論が復位される。資本—賃労働の対抗、その基礎過程分析たる剰余価値論、資本蓄積論は、厳密な価値論、貨幣論の基礎上においてのみ、真に科学性をもちうるものであることからすれば、この旋回はいわば必然の成り行きともいえようか」（前掲誌、17ページ。力点——中川）。

1840年代～50年代におけるマルクスの経済学批判の進展過程についての中川氏のこうした所論は、けだし、示唆的で当を得たものというべきであろう。

ただ、ここでわれわれが注意しなければならないのは、中川氏の場合、上記の二つの「分析基準」はたんなる平列的補完関係にあるのではなくて、「資本関係基準」が主役をはたし、「商品＝貨幣関係基準」はたんに補助役をつとめるにすぎないとされている点である。げんに氏は次のように述べておられる。

「……近代市民社会＝資本主義的商品生産社会が疎外された共同社会たることをあますところなく暴露するには、資本関係基準のみをもってしては不可能であった。これは、たとえば剰余価値生産のメカニズム、資本主義的取得法則の科学的解明にとって、商品＝貨幣関係基準、一般的商品生産＝流通の法則把握が基礎となることによっても明らかであろう。……だが、『経哲草稿』の第1草稿はこの課題を果たさなかった。この限りで、第1草稿の近代市民社会分析は、いまだ一面的といえようか。そして、これを補うもう一つの視座は『ミル評注』において与えられているのである。すなわち、商品＝貨幣関係を基準にすえて近代市民社会をとらえ、一般的商品生産＝流通を表象し、分析対象としつつ、商品生産＝交換社会が本源的共同社会の疎外された形態であることを解明し、もって『草稿』を補う役割を果たすものこそ以下検討する『ミル評注』にほかならないのである」（前掲誌、36ページ。力点——引用者）。

ここで中川氏が、「近代市民社会分析」にさいして「資本関係基準」がいわ

ば主役を演じ、「商品＝貨幣関係基準」は補助役を果たすにすぎないとしておられることは明白であろう。そして氏にあっては、執筆順序の点でも、『経哲草稿』から「ミル評注」への順序が考えられているのであって、そのかぎりでも、氏は『経哲草稿』先行説の立場を採っておられる（といっても、この場合、「ノートⅠ」～「ノートⅢ」が『草稿』に先だって作成されていたことは大島氏の場合と同じく、暗黙のうちに前提されている）わけである。<sup>(注)</sup>

（注）ところが、『経済学ノート』の共訳者の一人である重田晃一氏は、その「訳者解説」のなかで、「わが国における『経済学ノート』研究」の状況を概観するにさいして、「大島と細見に代表される以上の両極的解釈にたいして、第3の解釈を提示しようというのが、……〔前掲〕中川論文である」として、ひきつづぎ次のように書いておられる。

「中川は『資本関係、資本による不払労働の取得という〈資本主義的取得法則〉は商品＝貨幣関係という一般の商品流通を……前提とし、媒介環としてはじめて成立する』といい、こういった観点から『J. ミル評注』は『手稿』と補完関係に立っていると主張する。すなわち、中川はまず『独仏年誌』の2論稿から市民社会分析の基準として、①商品＝貨幣基準と②資本関係基準という2基準を析出し、つづいて①は『J. ミル評注』に、②は『手稿』へと『さしあたり切り離されたまま継承された』といい、その意味でこれら二つの論稿は相互補完の関係におかれているとともに、こういった分離的継承はそれぞれの論稿における市民社会分析の内容を一面化し、人間的な本質（市民社会批判の原理＝基準）の疎外分析にたいしても少なからぬ差異を生ぜしめることになった、と主張している」（前掲訳書、「訳者解説」、233—234ページ。力点——引用者）。

このように重田氏は、『経哲草稿』先行説を唱える大島氏と、「ミル評注」先行説の見地に立つ細見氏という「両極的解釈」にたいして「第3の解釈」を提示したのが「中川論文」だったとされるのである。もっとも、そのさい重田氏は、中川氏における「商品＝貨幣関係基準」と「資本関係基準」とを直接とりあげて、それらの「補完関係」あるいは「相互補完の関係」をいっているわけではなく、それらの「基準」が内含されている諸論稿、すなわち一方では「ユダヤ人問題によせて」と「ミル評注」、他方では「ヘーゲル法哲学批判・序説」と『経哲草稿』の「補完関係」または「相互補完の関係」について語っておられる。しかし、この場合、重田氏が事実上、「商品＝貨幣関係基準」と「資本関係基準」との「相互補完の関係」を想定しておられることは明らかであって、だからこそ氏は、中川氏の見解をもつ

て大島氏の『経哲草稿』先行説それ自体とは異なる「第3の解釈」とされたのではなかろうか。だが、中川氏は、われわれがすぐあとで本文で見えるように、大島氏と同様——というよりもいっそう徹底した——『経哲草稿』先行説の見地に立っておられるのであって、この点、中川氏はむしろ『経哲草稿』先行論者の急先鋒であった、というべきではあるまいか。というのは、執筆順序について自説を展開した論者たちのうち中川氏だけが、「ミル評注」先行説を唱えた細見・平井両氏にたいし、はっきり名前を挙げて厳しく批判しているからである。この間の事情についても、われわれはすぐあとで本文において見ることにする。ところで、これまでの行論からも察せられるように、私はかねがね重田氏の学問上の仕事には心から敬意を抱いているものの一人であるが、しかし、中川論文をもって「両極的解釈」（大島氏と細見氏との）にたいして「第3の解釈」を提示したものだとする重田氏の上記の所説にかんしては、私はそれに疑問を表明せざるをえない。

なお念のため、中川氏にあっては、どこまでも「資本関係基準」が主だとされている点を示すもう一つの文章をここに引用しておこう。すなわち、氏はこうもいっておられる。「……『草稿』第1草稿は、主として、近代プロレタリアートに即したその疎外の内容と論理の解明を基調とするものであった。これに対し『ミル評注』は、一般的商品生産と商品流通、単純商品生産＝交換関係を分析対象とし、商品生産者、商品所有者としての人間の人間の本質からの疎外の内容と論理を解き明かすことを主題としている。だがいうまでもなく、近代市民社会は資本主義的商品生産社会であって単純商品生産社会と全く同義ではない。したがって、『ミル評注』において解き明かされた疎外の論理がひとまず妥当すると考えられるのは、人間が商品所有者として関係しあう領域、すなわち『本来的商品市場』、『労働市場』、それとして純粹に考察された資本の流通過程に限られる。この意味で『ミル評注』は第1草稿を補うものであるが、同時に一の限界をもつものであること、内容に立ち入る前にあらかじめ留意すべき点である」（前掲誌、37ページ。力点——中川、ゴシック——引用者）。

さて、上述したような見地に立つ中川氏としては当然のことながら、氏は自説とは異なる立場、すなわち「ミル評注」先行説の立場を採る論者たち（細見・平井の両氏、とくに細見氏）に鋭い批判の矢を放ったのであった。その点を見るまえに、あらかじめ、中川氏が細見・平井の両氏の所説について述べている文章を引いておくことにしよう。中川氏は次のように書いておられる。

「ところで、マルクスによる近代市民社会分析の展開・深化過程における二

つの分析基準〔つまり『商品=貨幣関係基準』と『資本関係基準』〕の位置関係の問題を、『草稿』、『ミル評注』の位置関係の問題として細見氏は次のようにいわれる。——すなわち、氏は、まず、『ミル評注』においてマルクスは三階級分化を表象し、階級社会を前提としつつも、『論理』としては自己労働にもとづく私的所有者から出発している』（前掲『マルクスとヘーゲル』132頁）と指摘されたのち、『だがマルクスは、すでに市民社会を《階級社会》として表象していた。とすれば、経済学的範疇の批判的展開は、当然ながら階級関係の必然性の解明にまで進まねばなるまい。事実マルクスは、『ミル評注』で、《貨幣》本質の考察にすぐつついて、階級分裂・階級関係への論理的展開の志向をしめしている。しかし……商品交換=商品生産の論理から、その論理的演繹において階級分裂・階級関係を展開することは、なんとしても不可能である。そこで、ふたたび出発点にたちかえって市民社会批判=経済学批判の論理を練りなおす。——「経済学・哲学手稿』（同上）。こうして氏は『ミル評注』→『草稿』という発展関係を示される。平井俊彦氏も細見氏と同様の見地に立っておられるかにみえる（『書評 K. マルクス著 杉原四郎・重田晃一共訳「経済学ノート」』、関西大学『経済論集』12巻5・6合併号）。またこれを裏づけるかのごとく細見氏は別稿『J. ミル「政治経済学綱要」への批判的評注——マルクスの最初の経済学研究より——』（『立命館経済学』10巻4号）において、『ミル評注』を記載するノートⅣ、Ⅴが『草稿』執筆以前に作成されたものと推定されている（同上、120頁）』（前掲誌、17—18ページ。力点——中川）。

ここに示されている、細見・平井両氏の「ミル評注」先行説にかんする中川氏の要約的説明が、総じて的確なものであることは、さきに本稿〔5〕でわれわれが両氏の見解を吟味したところ（本誌、29—32ページおよび33—35ページ参照）からも明らかであろう。が、中川氏はさらにすすんで、上の細見・平井両氏の見解を次のように批判したのである。

「だが果してこの推定は全く疑問の余地なく正当なものであろうか？ 例えば『ノート』邦訳者は、ノートⅠ～Ⅴは44年4月～8月頃に執筆されたとの推定が一般的であるとしたあと、『経済学批判要綱』巻末文献索引の解説を引き

つつ『ミル評注』は44年夏作成されたものとする見解を紹介している。ちなみに、『要綱』当該箇所は次のごとし。『この著作（ミル『綱要』——中川）からの抜書きは1844年の夏パリで書かれた、日付も番号もないノートのなかにある。MEGA I/3, 520—550ページをみよ』（『要綱』, V, 1308—9頁）。これに対し、『マルクス年譜』（M・E・L研究所編, 岡崎・渡辺共訳, 青木書店刊）によれば、当面の問題にとって重要な第1草稿〔4〕『疎外された労働』は、44年4月頃～5月執筆, 第2草稿以下は5月頃～6月, 序文は8月下旬となっている（同上, 30頁, 33頁）。また, 第1草稿にはミルの名前も引用文もなく, 第2草稿においてはじめてミルの名前が現われ, 引用文は第3草稿にはじめて見出される（その場合, 『年譜』のいうごとくであれば, 『ミル評注』はおそくとも5～6月頃に執筆されたことを予想させ『要綱』の夏執筆という推定と若干異なるが）等のことからすれば, 執筆順序は細見氏とは逆に, 第1草稿——『ミル評注』——第2, 第3草稿という推定も可能であるかと思われる。もしかかゝる推定が正しいとすれば, 細見氏の立論の前提の一つは崩れることになるまいか（前掲誌, 18ページ。力点——中川）。

見られるとおり, ここで中川氏は, 「『ミル評注』→『草稿』という発展関係」=執筆順序を考える細見・平井両氏の「推定」, つまり「ミル評注」先行説にたいして根本的な疑問を提起されている。そして中川氏は, 『経済学ノート』邦訳者たちの「訳者解説」, 『経済学批判要綱』巻末の「文献索引の説明」, 『マルクス年譜』, さらには『経哲草稿』の各「草稿」の内容などを引き合いに出しながら, 結局, 「執筆順序は細見氏とは逆に, 第1草稿——『ミル評注』——第2, 第3草稿という推定も可能であるかと思われる」と結論し, さらに「もしかかゝる推定が正しいとすれば, 細見氏の立論の前提の一つは崩れることになるまいか」と書いておられる。もっとも中川氏は控えめに, こうした結論はどこまでも「推定」に基づくものにすぎないとして, 「だが, いずれにしてもおよそ推定の域を出ないものである以上, ここでは文献史的問題のこれ以上の詮索はひとまず留保し」（前掲誌, 18ページ, 力点——中川）云々といつて, いわば矛をおさめるのであるが, それにしても, 中川氏の上掲の所論は「ミル評

注」先行論者たちにとっては相当に手痛い打撃であった、というのが事実であろう。

## 〔7〕 む す び

さて、われわれは、これまでの検討結果をまとめるにあたって、まず本稿の〔3〕「ローゼンベルクの先駆的研究」で明らかとなった諸点を要約することから始めよう。

(1)ローゼンベルクの著書『初期マルクス経済学説の形成』の「目次」を一見したところでは、彼が「パリ・ノート」と『経哲草稿』とを、それぞれに独立した、ひとまとまりのものとして扱っており、しかも執筆順序は全体として前者から後者への順だと思なしていたもののように推察される。(2)しかし、いま少し詳しく内容に立ち入ると、彼はまず、「ボアギュベールからの抜粋」には「『1845年』と書いてある」として、これを考察圏外に置いたうえで、「ノートⅠ」～「ノートⅤ」、とくにセー、スミス、リカードウ、エンゲルス、ジェームズ・ミルを重点的に考察する。(3)そのさいローゼンベルクの考えでは、エンゲルス「大綱」の「概要」は格別の重要性をもつものであって、「マルクスは〔他の経済学たちの著作からの〕抜粋のまえに、彼が作成したエンゲルスの『大綱』の概要を置いている」と見なされるべきである。(4)ローゼンベルクは、エンゲルス以外の経済学者たちからの抜粋の作成順序は、セー→スミス→リカードウ→ミル、というふうに考えており、しかもセー＝スミス抜粋とリカードウ抜粋とのあいだには、また後者とミル抜粋ノートとのあいだには、形式的にも内容的にも明白な相違があり、とりわけ「ミル評注」は「パリ・ノート」中もっとも理論水準の高い「特別」のものだと考えていた。(5)しかしローゼンベルクは、これらの抜粋ノートと『経哲草稿』（これは「第4草稿」＝「付録」を別とすれば、三つの草稿から成る）との執筆順序の問題を立ち入って考察しようとはせず、旧メガ編集長アドラツキーの説明どおり、「ノートⅠ」～「ノートⅤ」

全体を『経哲草稿』全体の準備ノートと解し、だから執筆時期も『経哲草稿』が全体として「パリ・ノート」（ただしポアギュベール抜粋を除く）よりもあとというふうに考えていた。(6)つまりローゼンベルクによれば、マルクスは「ノートⅠ」から「ノートⅤ」までを書きおえてから『経哲草稿』「第1草稿」の執筆にとりかかった、ということになる。(7)しかも、この「第1草稿」にかんしてローゼンベルクは、「マルクス自身が『賃金』という表題をつけた草稿」について語り、かつ「第1草稿」で重要なのは「賃金」という名のついたこの「草稿」だけであって、「利潤や地代の問題」は「賃金そのものの分析に必要なかぎりでは触れられているにすぎない」と言明する。(8)だが、この場合にはローゼンベルクは、マルクスの「第1草稿」のオリジナル原稿が、縦線による三欄分割ないし二欄分割などの形で書かれているという旧メガ I/3 編集部の注意をすら忘れていたといわざるをえない。

さて、つぎにわれわれは、「ラーピン論文」公表以前にわが国で見られた、執筆順序の問題についての二つの異なった所説、すなわち「ミル評注」先行説と『経哲草稿』先行説との要約に移ろう。

#### ◇ 「ミル評注」先行論者たちの見解

##### (A) 細見英氏の場合

(1)細見氏は、旧メガ編集長アドラツキーの「序説」にしたがって、「パリ・ノート」のうち、「ミル評注」を含む「最初の五冊（「ノートⅠ」～「ノートⅤ」）」は『経哲草稿』以前に執筆・作成されたものと考えていた。(2)細見氏の見解によれば、「ミル評注」で「経済学的諸範疇批判の最初の試論的展開」をおこなったマルクスは、「当然ながら階級関係の必然性の解明にまで」すすまなければならなかったが、「商品交換＝商品生産の論理から、その論理的演繹において階級分裂・階級関係を展開すること」は「なんとしても不可能」であった。(3)そこでマルクスは、「ふたたび出発点にたちかえって市民社会批判＝経済学批判の論理を練りなおす」のであって、こうして出来あがったのが『経済学・哲学草稿』にほかならない。(4)だから、「ミル評注」と『経哲草稿』とのあいだには、「分析視角と論理展開の方法」の点で「まったく」の「転換」がある。

つまり、交換関係視角から生産関係視角への「まったく」の「転換」。(5)したがってまた、細見氏の場合、分析視角の深化の点からも、執筆順序は「ミル評注」から『経哲草稿』へのはずだ、ということになる。

### （B）平井俊彦氏の場合

(1)平井氏にあっては、「パリ・ノート」と『経哲草稿』とをそれぞれひとまとめにしたうえで、それらの執筆順序を「パリ・ノート」(=『経済学ノート』)全体→『経哲草稿』とする傾向が見られる。(2)この点では、氏は旧メガ編集部(とくにアドラッキー)の説明やローゼンベルクの見解からかなり強い影響を受けていたとも考えられる。(3)それはともあれ、平井氏は、『経済学ノート』をつらぬく「理論的地平」は「交換関係」であって、この『ノート』では「経済的諸カテゴリー」の展開場所も「交換過程であり、けっして生産過程ではなかった」と主張される。(4)そしてここに、この『ノート』段階でのマルクス思想の特徴があると平井氏は強調されるのだが、しかし他方、氏によれば、『経哲草稿』になると、「社会分析の理論的地平ははっきりと生産過程となっており、ここにはじめて生産過程が理論の分子から分母へと転換をおこなう」ことになる。(5)こうして平井氏もまた、執筆順序の問題にかんしては細見氏と同じく、『経済学ノート』(とくに「ミル評注」)から『経哲草稿』へ、というコースを想定しておられた。

### （C）宮崎喜代司氏の場合

(1)宮崎氏は、「ミル評注」ではマルクスは「商品と貨幣の次元における疎外(=物神化)に関する限り、ある程度その理論的把握に成功した」とされるが、他方で、「この段階のマルクスにおいては対象認識とその理論把握との間にズレがある」と主張される。(2)すなわち、氏の見るところでは、なるほど『経済学ノート』でもマルクスはすでに「私有財産批判の立場」に立ってはいいたが、しかし、そこでの彼の批判は「事実的には賃労働に着目しながらも、理論的には貨幣にまで発展すべき『商品交換における疎外の論理』によるものにとどまっていた。(3)ところが、宮崎氏によれば、私有財産が「直接に賃労働の産物であるとされている」『経哲草稿』は『経済学ノート』(「ミル評注」)よりも「一

段と具体的な次元で私有財産を把握している」といってよい。(4)つまりマルクスが、「本来の『疎外された労働』＝賃労働における疎外を理論的に認識し」、こうして「国民経済学批判の基本視角」を「初めて設定した」のは『経哲草稿』においてであった。(5)こういう見地から宮崎氏は、執筆順序は当然、「ミル評注」→『経哲草稿』でなければならないとされたのであった。

◇ 『経哲草稿』先行論者たちの見解

(A) 大島清氏の場合

(1)大島氏は『『経済学・哲学手稿』と『経済学ノート』とのあいだには、マルクスの経済学についての見解に相違がある」としながら、前者では「『疎外された労働』の概念は、資本と労働者の関係を直接収奪者と被収奪者に還元する」のにたいし、後者、すなわち「ミル評注」では、マルクスは「外在化（疎外）の論理を商品交換における人間の関係においてとらえよう」と試み、「ここでは外在化は譲渡として、人間相互の関係が考察される」ことになる、と主張される。(2)こうして大島氏は、『経哲草稿』における疎外論と「ミル評注」におけるそれとは「まったく違った」ものだと力説し、前者での「疎外された労働」は結局、たんに「直接的な収奪関係を示すにすぎなかった」が、「ミル評注」では「貨幣・価値・商品交換を理論的に考究することによって、人間の自己疎外の概念が『手稿』の『疎外された労働』よりも具体的かつ理論的になってきた」と考えられる。(3)そのかぎり、「ミル評注」は『経哲草稿』よりも「社会的関係としての把握においてははるかに進んでおり」、だからまた、理論認識の水準の点でも「ミル評注」のほうが『経哲草稿』よりも「はるかに」高いとせねばならない。(4)こうして大島氏の場合、執筆順序は当然ながら、『経哲草稿』から「ミル評注」への順だということになる。

(B) 中川弘氏の場合

(1)中川氏は『独仏年誌』所収のマルクスの二論文、すなわち「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル法哲学批判・序説」の分析基準を問題にしながら、前者での「近代市民社会分析の基準」は「商品＝貨幣関係基準」であり、後者でのそれは「資本関係基準」だとされる。(2)そのうえで氏は、「商品＝貨幣関係

基準」は「ミル評注」へ、また「資本関係基準」は『経哲草稿』へと、「さしあたり切り離されたまま継承され」と考える。(3)ただし氏の場合、上記二つの「分析基準」はたんなる平列的補完関係にあるのではなく、「資本関係基準」のほうが主役をはたし、「商品＝貨幣関係基準」は補助役をつとめるにすぎないとされる。(4)このような見地から中川氏は、執筆順序の点については『経哲草稿』が「ミル評注」よりも先行すると解される。(5)そして、こうした立場から中川氏は、「ミル評注」先行論者たち、とくに細見氏を批判して、さまざまな論拠を示したのちに「執筆順序は細見氏と逆に、第1草稿——『ミル評注』——第2，第3草稿という推定も可能である」と結論し、さらにすすんで、「もしかかる推定が正しいとすれば、細見氏の立論の前提の一つは崩れることになるまいか」と、いわば詰め寄られたのであった。



以上、われわれは、「パリ・ノート」と『経済学・哲学草稿』の執筆順序の問題にかんする諸家の見解を整理・要約してきたのだが、ここでわれわれは、いまや次のようにいうことができよう。——わが国では、「ラーピン論文」公表まで、執筆順序の問題をめぐるさまざまな所説がおこなわれてきたが、それらは大別すれば、「ミル評注」先行論者たち（細見・平井・宮崎の諸氏）の見解と『経哲草稿』先行論者たち（大島・中川の諸氏）の見解とに分けることができる、と。ところで、重田晃一氏がすでに『経済学ノート』「訳者解説」で指摘しているように、「このばあい問題解決の鍵の一つは『手稿』と『J.ミル評注』の執筆順序の考証」にあった（前掲訳書、234ページ参照）といってよからう。そして、この「執筆順序の考証」を手堅くおこなったのが、ほかならぬ「ラーピン論文」だったのであり、本稿の冒頭部分でも書いておいたように、「ミル評注」先行論者の一人であった細見英氏が、この「ラーピン論文」——それは『草稿』先行説のほうを文献考証的に裏づけるものであった——を邦訳して「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」との題名のもとに『思想』誌上に発表したのであった。しかも、これには「訳者まえ

がき」が付せられていて、細見氏は、この「まえがき」のなかで、「ラーピン論文」の「説得力はすこぶる強い」として従来の自説、すなわち「ミル評注」先行説を完全に放棄し、「私はここに、『ミル評注』と『経哲草稿』の執筆順序についてはこれまでの解釈を撤回して、ラーピン説に拠ることを表明したい」（前掲誌、1971年3月号、101ページ参照）と宣言されたのである。こうして「ラーピン論文」は、その後、わが国の初期マルクス研究、とくに「パリ・ノート」と『経哲草稿』の研究に次第に波紋の輪を拡げてゆくことになったのだが、しかし、この間の事情については、私は稿を改めて論述することにしたと思う。